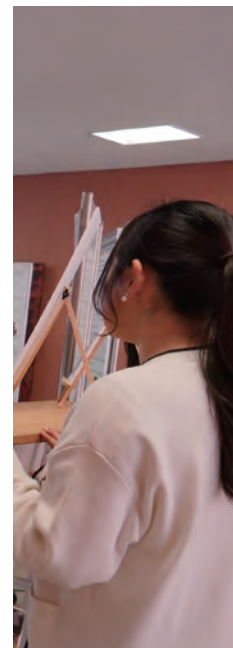
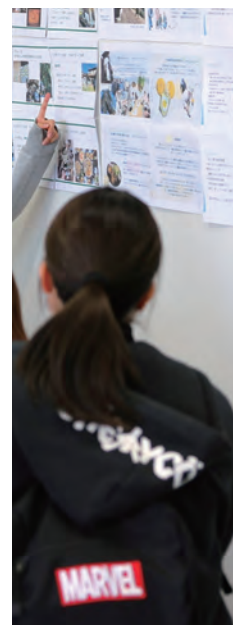


2024年度 地域経営学部 地域協働型教育研究 報告書



はじめに

地域経営学部長・井上直樹

本報告書は、地域経営学部が2024年度に開講した学年別の演習（ゼミナール）科目の学修成果を取りまとめたものである。2016年4月に本学が開学後、地域協働型教育研究に関する報告書を毎年度刊行している。ちなみに開学から4年間は、大学全体としての報告書であったが、情報学部が発足した2020年度からは、地域経営学部としての報告書を刊行している。

本報告書は学年ごとの学修成果を示すために3つのパートに分けて編集されている。1年生を対象とする地域経営演習Ⅰ・Ⅱのパートでは、開講した6つのクラスそれぞれに1頁を割り当てている。クラスを担当した教員による活動内容と学修の狙いに関する説明に続いて、受講学生が学びから得たこと、気づいたことを語っている。2年生と3年生を対象とする地域経営演習Ⅲ・Ⅳと地域経営研究Ⅰ・Ⅱのパートでは、担当教員が学修の狙いについて説明し、両学年の受講学生が学びから得たこと、気づいたことを語っている。4年生を対象とする卒業研究Ⅰ・Ⅱのパートでは、本年の卒業生たちが提出した全ての卒業研究を取り上げ、その研究題目の一覧を示している。

地域経営学部では上記以外にもいくつかの演習系科目を設置している。そのなかでも「地域キャリア実習」と「病院実習」は、地域社会で活動する企業、自治体、医療機関等の皆様のご協力のもとで、学生が実務を経験するという意味で、地域協働型教育研究の重要な構成要素となっている。本年度の報告書においては、「地域キャリア実習」と「病院実習」についても、その代表的な活動事例を取り上げ、概要を紹介している。

本報告書のタイトルは、今年度より「地域協働型教育研究」報告書となった。本学では、全ての学生が卒業研究を行い、卒業することになっている。入学後の各学年における学修成果は、最終的に卒業研究に集約されるため、本報告書のタイトルにも「研究」という文言を明記した。あらためて述べるまでもないが、「地域協働型教育」は、本学が開学以来、基本理念として掲げてきた教育目標である。2026年度から始まる新たな教育体制とカリキュラム内容の編成を見据え、より一層研究に重点を置くことを表現したものである。

本学の演習科目では、学生が教員とともに地域を訪問し、住民の方々と交流・協働して地域の課題を発見し、解決の方策についても検討することが重視されている。本報告書をお読みいただければ、ゼミにおいては地域社会の現場に入り込んだフィールドワークや、課題解決に向けた実践志向の学修が占める比重が高くなっていることをご理解いただけるであろう。



目次

はじめに

地域経営演習Ⅰ・Ⅱ（1年生）

地域経営演習Ⅲ・Ⅳ（2年生）

地域経営研究Ⅰ・Ⅱ（3年生）

卒業研究Ⅰ・Ⅱ（4年生） テーマ一覧

地域キャリア実習

病院実習

地域経営演習Ⅰ・Ⅱ



福知山市 三和地域での学び

教員名 亀井省吾・張 明軍



活動内容

三和地域において、交流観光まちづくり・公共・企業活動の視点から演習を実施しました。今年度も、本地域で盛んなスポーツであるベタンクを演習に取り入れています。主なフィールドワークは、三和学園との交流、三和荘グランドでのベタンク実習のほか、大原神社と民泊施設、瑞穂環境保全センター、新しいものづくりや六次産業化を目指す企業の現場視察などです。

学修のねらい

本演習では、三和町における活動を多角的な視点から見ることで、学びの視座を拡げていくことをねらいとしています。また、地域の協力を得て、ベタンク競技者、三和学園の中学生、民泊運営者、企業経営者やマネージャーなど地域の多様なプレーヤーの皆様と交流することにより、学びの質を深めていくことも、もう一つのねらいとしています。

学びから得たこと・身につけたこと

今回の演習では、多くの企業様や学園などにフィールドワークとして訪れ、地域とそこに属するものとのつながりを強く感じました。企業様においては、地元のお祭りへの参加や特産品の作成などで地域に貢献されていました。地域への関わり方は市や町の職員でなくとも多様な関わり方ができることを学びました。学園での活動では自分事の視点を持たせる必要性を学びました。何を行うにしても自分事は必要になると感じました。

伊藤群晴

本演習を通して、三和町には様々な魅力があることを知りました。技術や自然、歴史など、三和町ならではの魅力があり、それらを掛け合わせて新たな魅力へと発展させる方法を身につけました。また、地域の魅力を発見する上で、自分たちのような外部から訪れた人間の視点は重要です。その視点と、実際に生活している人の視点の両方を組み合わせることで、よりその地域に寄り添った形の地域活性化案を考えることができると学びました。

近藤唯衣

本演習を通じて、地域活性化や事業を成功させるためには、絶対に成功させるという強い意志を持ち、地域の人やモノといった資源を最大限活用することが重要であると学びました。また、地域資源は日常の身近な場所にあり、組み合わせ次第で無限にアイデアを生み出せることを実感しました。今回の演習で学んだアイデアの出し方や工夫を、今後の活動に積極的に活かしていきたいと思っています。

高田智成

これまでの演習では福知山で起業し、地域の発展のために尽力してくださっている様々な業種の方々の話を伺うことが出来ました。実際に話を伺うことで物事を成し遂げるために行った企業努力、地域との関わり方を知ることができたことで、福知山（特に三和町）への関わり方を自分なりに考える機会となりました。この経験をさらに次年度で進化させることで自分にしか出来ないことをやり遂げたいです。

畠山瑛成

福知山市 夜久野地域での学び

教員名 神谷達夫・中尾誠二



活動内容・学修のねらい

前学期は、第1回（5月9日）福知山市夜久野支所・夜久野みらいまちづくり協議会・図書館等の機能が集約された『夜久野ふれあいプラザ』等、第2回（5月23日）古民家活用『宮カフェ』、第3回（5月30日）大峠地区等の登山愛好者組織『居母山クラブ』、第4回（6月20日）農家民宿＆お試し住宅『米ya』、第5回（7月4日）大阪から移住された『才谷の石田さん宅』で各回フィールドワークを行いました。

後学期は、第1回（10月10日）『天満神社』秋祭り体験、第2回（12月7日）『夜久野学園』中2生との交流は全員で行い、それ以外は学生が選んだテーマに応じた複数班それぞれ現地を訪問し、実践的な演習を進めました。規定授業時間外にも『米ya』宿泊（12月11日・12月18日）等で多くの学生が地元の人達と交流を深めました。

これらを通して夜久野地域の現状と課題、様々な取組について学びました。

学びから得たこと・身につけたこと

地元以外の地域と密接に関わるという経験は今までしたことなかったのですが、夜久野町の方々と関わっていく中で、人口減少という現状からは分らなかった地域の活発さや、人々の繋がりを感じることができました。1年の演習を通して、自分の積極性の無さに気づくことができ、1回1回のフィールドワークを行っていく中で地域の方に自分から話しかけたり、話し合いを進めたりなど少しずつ成長することができました。

大内ひろ子

フィールドワークに繰り返し参加し、報告資料の作成に取り組む中で実際に目で見たり体験したことを、結果の部分だけで終わらせることなく考察まで持っていくという能力を身に付けることができました。繰り返し夜久野地域を訪れることで、「幸せに暮らす」という考え方の価値観が変わりました。田舎だから、都会だから、で幸せかどうかが決まるのではなく、その地でどう暮らすかが重要であるという考え方を得ることができました。

岡地慧明

一言で言うところ「百聞は一見に如かず」の重要性を体感することができました。統計データ上で調べてみると人口減少や過疎化、少子高齢化など、後ろ向きな印象がある地域でも、実際に入ってみると率先して活発に活動されている人が目立ち、地域は明るい雰囲気がありました。この活動がなければ知ることのなかったことです。どんな状況でも楽しく取り組もうとする意識をもつことこそ、人生を楽しむ極意かもしれないと心得ました。

竜田 蒼

私は地域経営演習を経て、地域に対する基礎知識から地元とは違う地域との向き合い方を学びました。そこから、実際にフィールドワークに行き定住者に限らず移住者の方のお話も聞いて、事前調査では数字だけに注目していましたが、実際に訪れて自分自身の肌や目で地域と触れ合うことの大切さを身につけました。今後は、この視野の広がりであったり数字だけでなく実際に触れ合った経験を糧に地域に携わっていきたいです。

花岡愛華

大江町での学びを実践に変える地域共創プロジェクト

教員名 福嶋真治・大門大朗



活動内容

前学期では、座学として、①福知山市の地域行政や大江町についての講義、②実践手法の学習などを行いました。また、バスによる大江町の視察を2回、宿泊学習を1回行い、観光資源を切り口として大江町の地域特性を理解することを心がけました。後学期では、①イベント班、②Washiは鬼club班、③美食家班、④ピザ班に分かれ、グループワークやイベント実施などの活動をし、最終回で関係者を招聘し、各班より活動内容についてのプレゼンテーションを行いました。

学びから得たこと・身につけたこと

前学期は、大江町に足を運び、文化や課題を学び、後学期は、各グループに分かれてプロジェクトを進めました。私のグループは、大雲記念館を利用した脱出ゲームイベントを実行しました。結果として私たちの想像以上の方が来場し、イベントを楽しんでいました。市役所の方・地域の方々に協力いただき、地域の建物を生かしたイベントを成功させることができました。この取り組みを活かしてゼミにも積極的に取り組みます。

青山久恵

私は1年間、地域経営演習で大江地域を対象としたイベントを計画・実行しました。私のグループは「第2回鬼のお面コンテスト」と和紙を活用したワークショップを開催させていただきました。地域の方との交流を経て、イベントを成功させることができました。この演習を通して、地域の方と交流することで地域の魅力に気づき、地域の活性化につながると感じました。今後、この経験をもとにコミュニティ形成に協力していきたいです。

伊藤未来

学修のねらい

前学期は、地域の方からの講演やフィールドワークを通じて、大江について広く知ることを目指しました。後学期では、「大江に貢献できる取り組み」をテーマに、地域住民の協力を得ながら学生主体で活動内容を検討・決定しました。実際の活動においては、二年次以後の地域活動に活かせる学修とするため、地域の方と連携を取りながら協働して進め、地域住民に成果を還元できるよう努めました。

私の班は、大江町の毛原の棚田にあるピザ窯に目をつけ、「ピザ作り体験」を企画・運営しました。イベントには、幅広い世代の方が参加して下さり、ピザを作りながら大江の方と充実した交流をすることができました。活動を通して、自分から地域の方に声をかけ、交流の輪が広がっていくことにやりがいを感じました。また、大江の方や班のメンバーの協力があったので、感謝を忘れず、これからの学びに繋げたいです。

柳瀬天羽音

私の班は、大江町の玄関口である大江駅をもっと観光客に立ち寄ってもらえる駅にすること、また大江駅の売店の売り上げ向上を目的として活動しました。大江駅の方に協力してもらいながら売店のレイアウト変更などを行い、この活動を成功させることができました。企業の方との対談という貴重な機会もいただき、この活動を通してたくさんの方と関わることができました。今後このような関わりを大切にして学びを深めていきたいです。

梅原陽愛

地域との協働実践を通して プロジェクトマネジメントを学ぶ

教員名 谷口知弘・小山元孝



活動内容・学修のねらい

本学の位置する桃映中学校区と大正小学校区をフィールドに、公民館との協働実践による問題発見から解決に至るプロセスを試みるプロジェクトを実践しました。このプロジェクトの経験から、卒業までの地域協働型教育研究を通して、持続可能な地域社会の実現に貢献できる「実践的能力」を育成するために必要な二つの基礎的な力を身につけました。一つは「地域社会に学び貢献するために必要な姿勢や態度」、もう一つは「チームで問題解決のプロジェクトを実践するプロジェクトマネジメントの基礎知識」です。

地域協働実践では、桃映地域公民館及び大正地区公民館との協働により2つのプロジェクトを実践しました。

●桃映地域公民館PJは、公民館と協働で多世代交流の促進を試みました。大学生と子どもや地域住民の交流の場づくりとして紙芝居の読み聞かせやゲームを用いた交流カフェを実施しました。

●大正地域公民館PJは、公民館まつりで運営側と来場者を楽しい雰囲気を広げること、祭りに新しさを生み出すことを試みるため、スタンプラリーや子どもの遊び場の提供、ステージ企画を実施しました。

学びから得たこと・身につけたこと

地域経営演習を通して、周りをよく見て行動することの重要性を学びました。親子スポーツデーでは子供たちがどんな遊びをしたいか考え、楽しんでもらえるように関わり方を工夫し、また、桃映コミセンフェスタでは、メンバーで役割分担して場の雰囲気作りに取り組み、お客さんにくつろいでもらえるカフェ運営を行いました。これらの経験から、周りをよく見て自ら行動することで、活動をより良くできたと実感しました。

上佐麻結（桃映地域公民館PJ）

この地域経営演習を通じて、どんな時でも真剣に取り組むことの大切さを学びました。親子スポーツデーで紙芝居を読む際に、初めは休みの日に練習することをめんどくさく思っていたが、気持ちを切り替えて試行錯誤しながら練習した成果を子どもたちに披露して、子どもたちの楽しそうな顔を見た時には真剣に取り組んでよかったと感じました。また、コミセンフェスタでのカフェの成功はチームが一丸となって準備したこと、周りの大人たちの支えによるものだと考えています。

亀井海人（桃映地域公民館PJ）

公民館まつりに参加する人が多く、子どもからお年寄りまでが楽しんでいたこと、まち全体でまつりを作り出していることが良さだと思いました。気さくに声をかけてくださる方がいたり、私たちの急な依頼を快く受け入れてくださったりと、温かい人が多いと感じました。公民館まつりの企画を子どもたちが全力で楽しんでいる様子を見て、子どもたちの存在で地域がより明るくなっているのと感じました。

本多紀花（大正地区公民館PJ）

公民館まつりを通じて感じたことは、「貢献度の高さ」と「繋がり」です。まつりの運営に当たっていた方々は、挨拶を欠かさずこちら側の準備にも積極的に手伝っていただいたり、アドバイスをいただいたり自分事のように手伝っていただきました。また、撤去作業でも常々我々のことを気遣い、私たちの使用したテントの手伝いを積極的に行うなど、貢献度の高さや繋がりを大切にしている姿勢に驚きました。

横田啓史（大正地区公民館PJ）

廃校活用・地域づくり組織から 考える地域PBL（Project Based Learning）

教員名 木村昭興・杉岡秀紀



活動内容・学修のねらい

1-Eクラスは、地域のパートナー団体へのフィールドワークを通じて、北近畿、とりわけ福知山市が抱える現状や課題を学ぶとともに、調査における基礎的なスキルを修得することをその目的に、2グループに分かれ活動を展開しました。

川合チームについては、近年、三和町にある旧川合小学校にて、フィールドワークや調査を行ったほか、「かわいい元気まつり」に実行委員会から参加し、ニュースポーツやクイズラリーの実践、アンケート調査に取り組みました。

庵我チームについては、由良川藍同好会の協力も得ながら、藍の認知度についてのアンケート調査を実施したほか、学園祭や福知山マラソンに出展し、PR活動を行いました。また、地元の地域団体が開催する「秋のコンサート」に協力しました。

その他、京都市内や福知山市内の経営者や高校生との対話を行い、視野や見聞を広める活動も行いました。

学びから得たこと・身につけたこと

本演習の活動を通して学んだことは現場の大切さです。川合元気まつりでは、世代問わず楽しんでもらえる企画を考え、実現することが出来ました。実際に地域に出向くことで、人々との交流でしか得られない学びがあることを知りました。1年間を通して、地域づくりの手法を学ぶ上での必要な力がついたと感じています。また、経営者との対話では、働き方に対する世代間のギャップや時代の変化に対応することの難しさを感じました。

尾崎紗成

この1年間で、フィールドワークを通してたくさんの方と触れ合う機会がありました。特に、藍染体験をしたり藍染の展示会を見に行ったりした際には、地域の方の由良川藍に対する愛が伝わりました。また、庵我地域や由良川藍同好会のみならず協力しながら、地域活性化に携われたのは、とてもいい経験をさせていただいているなと感じました。様々な場所で行ったアンケート調査や情報発信を、これからの学びに活かしていきたいと思っています。

四方 稀

この1年間で私は、お客さんとして地域と関わるのではなく、当事者の立場になって客観的に考えることで、地域の抱える課題が見えてくるのだとわかりました。実際に藍染体験をするなど藍染について知っていく中で庵我地域への愛着が生まれ、伝統文化の可能性を感じました。また課題の解決のために話し合いを重ねましたが、方向性やゴールを見失うことがあり、常にストーリーをもって活動することの大切さを学ぶことができました。

妹尾隆玖

演習を通じて、地域イベントが単なる「楽しみ」を超え、地域の未来を形作る力を持っていることを実感しました。川合元気祭りの準備やアンケート分析を通じて、住民の絆を深め、外部の関心を引き寄せる役割を果たすことがわかりました。しかし、その運営における資源不足や継続性の問題が浮き彫りになり、地域活性化には戦略的な視点と長期的なアプローチが必要だと痛感しました。

溝渕 稜

保健医療福祉の地域課題を発見し 情報学の視座から解決

教員名 川島典子・岡本悦司・星 雅丈



活動内容・学修のねらい

地域経営演習Ⅰ・Ⅱ－Fクラスでは、保健医療福祉の視座から人口減少に苦慮する北近畿における地域の課題を把握し、その課題解決の方法を情報学の視点から考える講義を行いました。具体的には、まず京都府北部の課題を知るために、宮津市、舞鶴市、福知山市三和町にフィールドワークに赴きました。宮津市では、天橋立や、特別養護老人ホームと障がい者施設および保育園が同居している複合施設「マ・ルート」を見学しました。舞鶴市では、

援護局による引揚の歴史を学ぶために引揚記念館や引揚桟橋を訪れました。いずれも、宮津市、舞鶴市の医療福祉に関する事前学習をした上で、フィールドワークに行き、その後、事後学習も行っています。また、中山間地域である福知山市三和町の事前学習をした上で、三和町の障がい者福祉施設「福知山学園」に赴きました。「福知山学園」ではICTを駆使した見守りについて学んでいます。

学びから得たこと・身につけたこと

福祉施設や歴史的な現場を訪れることで、地域に根ざした医療福祉の重要性を実感しました。特に印象に残っているマ・ルートでは、異なる世代や障害を持つ人々が共に生活する環境を見学し、共生社会の実現に向けた取組を知るきっかけになりました。また施設の運営や福祉サービスの提供において、地域の特性や住民との協力が不可欠であることを実感し、地域経営における課題解決の重要性を考えるきっかけになりました。

松本恭佳

座学では、医療・福祉の観点から京都府北部の現状や行われている取組を学び、特に介護現場の変化や充実さが印象に残っています。また、フィールドワークでは、実際に現場を見たりお話を聞いたりすることにより、座学で学んだもの以上のものを得て知識をより深く理解することができました。したがって、地域経営演習における学びを経て、主体的に学ぶ姿勢や多様な視点から物事を考える力を身につけられたと思います。

尾崎咲菜

私は「マ・ルートと福知山学園の見学」が印象に残っています。2つの施設を見学して福祉施設のイメージについて知識を得ることができました。私の以前までの福祉施設のイメージは「職員の方々の仕事が大変」「人間関係が良好でない」などの悪いイメージが先行していたが実際は職員の方々も明るく仕事をしておられ、職員以外の方ともコミュニケーションが取れていたため、高齢者の方の認知症予防になったと思います。

藪内樹理哉

私が地域経営演習を通して、想像する力が少し身に付いたと思います。講義だけでは理解し難い現場の課題や工夫、取り組みなどを、働く人の話や実際に足を運んで見学を行うことで、それらを自分の目で確かめ、利用者を観察し、自分ならどうするだろうと、自分なりに分析を行いました。これらは想像する力を向上させました。更に、そこへ自分を投影し、将来の働くイメージを得ることができました。

中尾直歩

地域経営演習Ⅲ・Ⅳ



北近畿9市町への訪問を通して地域の多様性を知る

教員名 大谷 杏



学修のねらい

2年生のゼミでは、各市町に焦点を当て、文献による「事前調査」、「現地調査」、教室での「報告」の3段階で北近畿の多様性について学びます。訪問先は社会教育施設を中心とした北近畿9市町の名所です。2024年度は前期に、福知山市（三段池公園、福知山城、フクレル、ゆらのガーデン、佐藤太清記念美術館、丹波生活衣館）、伊根町（伊根町観光協会「舟屋ガイドとめぐる、まるごと伊根体験」参加、浦嶋神社）、京丹後市（琴引浜、琴引浜鳴き砂文化館、アミティ丹後、夕日が浦）、綾部市（あやベグゼスクエア、綾部バラ園）、朝来市（生野銀山）、後期に宮津市（旧三上家住宅、傘松公園）、舞鶴市（赤レンガ博物館、舞鶴引揚記念館）、与謝野町（与謝野町観光協会「与謝野町ガイドウォーク」参加、旧尾藤家住宅、加悦鉄道資料館）、丹波市（柏原陣屋跡、丹波市立柏原歴史民俗資料館・田ステ女記念館、木の根橋、太鼓櫓）などを訪問しました。

学びから得たこと・身につけたこと

ゼミでは一年間を通して北近畿地方の様々な市町について、事前に調査、現地訪問をし、報告することを自分なりに他人に発表できるようにまとめるということで毎回反省点を見つけたり、他の人の参考になる部分を吸収出来たりしました。また、実際にその市町に訪れることで、空気感を味わうことができたり、意外な発見や、魅力の発掘だったりできました。これからフィールドワークで培った視点で他の地域にも訪れたいと思いました。

片岡悠音

1年間のゼミ活動で北近畿の市町でフィールドワークを行いました。現地で地域住民の方とお話する機会もあり、自分が観光客として感じた魅力と地域住民の方が感じている魅力や課題を客観的に比較することができました。人口減少が続いている地域のフィールドワークでは、過疎化や高齢化、担い手不足など、田舎が直面する社会課題を実感できました。同時に、その課題を解決するための地域住民の取り組みを知ることができました。

松浦稜人

キャリアパスを意識した能力開発

教員名 加藤好雄



学修のねらい

本年度の2年次演習では、生成AIを活用した学習効率の向上と推論能力の養成を重視するとともに、英語を活かした異文化理解を身につけることを大きな目標としています。具体的には、授業内容を生成AIで要約・整理する講義ノートの作成を通じて情報整理力や推論能力を養い、主に英語による海外講義（MOOCs）の活用を通じてリスニングやリーディング力を高めます。また、マーケティングカンファレンスへの参加を視野に入れ、基礎統計解析を修得することで、今後のマーケティング研究に必要な実務スキルの基盤を築いています。こうした取り組みは、卒業後にも役立つ専門性と国際的な視座の育成につながります。さらに、個人の学習進度や興味に応じてTOEIC対策や海外渡航による国際体験にも力を入れ、国際舞台でのコミュニケーション力を強化しています。本演習では、自律的に学びを深める姿勢を確立することを最も重要な目的と位置付けています。

学びから得たこと・身につけたこと

東京大学「GCI 2024 Winter」の受講は、データの解析・分析の具体的なスキルを身につけ、複雑なデータから有用な情報を見出す論理的な思考を磨き、実社会への応用力を高める貴重な機会になりました。また、ゼミの演習では、ゼミの仲間との意見交換を通じて多様な視点を獲得し、生成AIを活用して効率的な学習方法を実践することで、情報処理能力や問題解決力を向上させることができました。

後藤蔵之介

英語学習プログラムでは、生成AIを活用して効率的な学習方法を構築し、TOEICスコアを向上させるとともに計画力と自己管理能力を磨きました。また、エスノグラフィ的な国際体験として、約2週間にわたるラオス〜タイ縦断旅行を計画・実行しました。現地で文化や生活様式に触れる中で異文化理解力や適応力を養い、予期せぬトラブルへの対応を通じて考え方の柔軟性を身につけることができました。

中川立希

研究の方法を学ぶ

教員名 神谷達夫



学修のねらい

このゼミの特徴は、学生が望む内容に取り組むことです。そして、その研究分野は、あえて限定していません。研究の方法を学ぶ上で、自分が最も興味のある分野に取り組むことが適していると考えため、分野をあえて限定していません。そのため、本ゼミでは、多岐にわたる研究が行われています。今年度は、パーソナルカラーの分析や、音楽を聴いた際の脳波の変化、福知山城で実施されたイベントでのイルミネーション、夜久野町で開催されるイベントに向けた民泊施設でのイルミネーション装飾、オンラインゲームの流行に関する研究などを行いました。本ゼミでは、研究の方法を学ぶことを目的とし、数値的な分析を重視しています。例えば、イルミネーションイベントの研究では、機器の貸出時間を基に観光者の動向を分析しています。まだ2年生であるため、用いた手法は単純ですが、研究においては一般性が重要であることを理解することを目指しています。

学びから得たこと・身につけたこと

このゼミの特徴として、自己の関心のある分野を深く掘り下げて研究できる点があげられます。実際自分も、パーソナルカラーについての皮膚の透過や反射についての調査を行っております。パーソナルカラー診断時に使用する道具を駆使しながら専用のライトや照度計を組み合わせることで研究に励んでいます。個人の研究が主体であるためこの分野に集中してゼミ活動に取り組んでいます。

半田真菜美

私は音楽と脳について取り組みを行ってきました。音楽と脳に関する様々な論文に目を通して、読む力や論文を探す力が身につきました。協和音・不協和音との関係がある論文を参考にし、脳波を測定しました。さらに、「好きな曲」や「嫌いな曲」を聴いているときの脳波の測定しました。「好きな曲」を聴いているときは、リラックスできる効果があり、「嫌いな曲」ではリラックスしにくいという興味深い結果を得ることができました。

大槻紗那

企業と地域ークラウドファンディング活用と経営戦略の観点からー

教員名 亀井省吾



学修のねらい

本演習では、地域活性化への活用が期待されるクラウドファンディング（以下CF）の疑似体験や、地域発のグローバル企業の視察などを通じて、企業と地域社会の関わりを実地に体感することを狙いとしています。地域経営演習Ⅲでは、CFについて基礎を学んだ後、地域におけるサードプレイスとしてのカフェを題材に起案を疑似体験しました。地域経営演習Ⅳでは、グンゼ綾部本社の記念館・博物館を訪問し、創業から今日に至る事業を理解した後、同社ドメイン戦略の変遷について事業ポートフォリオマトリクスを用いてチーム分析しました。さらに、未来像を考察する中で、グンゼ研究所の先端研究を題材に用途開発を考案し、提案プレゼンテーションを実施しました。本演習ではゲストとして、CFを活用して商品開発する地域起業家をはじめ、第一線で活躍するデザイナーや企業マネージャーを招聘し実施しています。

学びから得たこと・身につけたこと

座学のみでなく、実際に、事業ポートフォリオマトリクスを用いて分析したり、プレゼンテーションを行うなど、実践を交えることで、理解力や分析力がさらに身についたと感じています。また、グンゼ研究開発部の先端研究を題材に用途開発を考案するという経験から、多角的な視点で物事を捉えることの大切さを学びました。やはり、自分のみでなく、他者の意見も取り入れ、活かすことで、創造の幅は広がるのだと思いました。

濱本菜那

私がゼミの学びから得たことは、意見交換を行うことの重要さです。GUNZEの企業分析を行った際、事業ポートフォリオ分析やクロスSWOT分析を行ったとき、様々な意見を出し合い議論することで、より具体的なアイデアを出すことができました。これにより視野の広い考え方を持つことができました。そのためこれからも議論の場では、自分の意見を述べ、相手との意見交換を通じて、様々な視点を持てるようにしていきたいです。

松本悠誠

社会福祉的 アプローチで解決 する地域課題

教員名 川島典子



学修のねらい

本ゼミでは、2年生ゼミ生7名と社会福祉的アプローチで地域課題を解決することを考えるためのゼミ活動を行いました。前学期は卒論作成に備えアカデミックライティングに慣れるための輪読を行い、後学期は興味のあるテーマから好きな本を1冊選び、その内容をまとめてもらいました。福祉の現場を知るために、福知山市夜久野町の高齢者福祉施設、舞鶴市社会福祉協議会、福知山市の子育て支援のNPOの活動の見学などのフィールドワークにも出ています。夏休みには、伊根町の伊根町社会福祉協議会で開催された老人クラブの活動に参加したり、宮津市の子育て支援センターの見学にも出かけるゼミ旅行を行いました。人口減少の激しい多くの中山間地域を抱える京都府北部の現状を知り、社会福祉的な地域課題に気づき、自分なりにその解決方法の糸口をつかむことを目的とした学びを行う1年でした。

学びから得たこと・身につけたこと

ゼミでは、輪読とフィールドワークを行いました。後学期の輪読では、卒業論文を見据えて興味のある分野の本をまとめて発表しています。フィールドワークでは社会福祉協議会や福祉施設を訪れ、話を聞いたり施設を見学したりすることで福祉の現場を知ることができました。また、ゼミ旅行では、伊根町社協老人クラブでの高齢者の方との交流や舟屋巡りなど、ゼミ内の絆も深まり、今後の研究に向けての材料にもなる良い経験ができました。

越智清香

私たちのゼミでは、介護支援施設や子育て支援事業など、社会福祉に関する様々な現場を訪問し、現場の方々のお話を伺ったり、施設を見学したりしています。これらの活動を通じて、日本の福祉の現状や課題を考察し、福祉の役割や支援政策、それに関わる人々への理解を深めています。ただ知識を得るだけでなく、実際の現場に触れることで、主体的に考える姿勢を身につけ、それを基にした研究や活動に取り組むことができました。

永田温大

地方自治体における移住施策の現状と課題

教員名 木村昭興



学修のねらい

本演習は、地域コミュニティを構成する民間企業の経営状況を把握し、会計の視点から行政の役割について学ぶことが目的です。具体的には、①財務会計の仕組みと、②財務情報や非財務情報の定量的・定性的分析手法に焦点をあてます。①では、財務会計の情報提供機能を理解し、プレゼンテーションスキルの向上を目指しました。②では、分析手法を学び、インタビュー調査を通じて地域の課題を把握しました。今年度は、地方自治体における移住施策の有効性をテーマに設定し、移住希望者を対象とした質問紙調査とインタビュー調査を実施し、移住希望者の移住要因の分析を行いました。また、各自治体が作成する移住パンフレットの記述内容を縮約化し、移住情報の類型化を試みました。その結果、移住希望者が求めている情報と自治体が発信する情報の間に乖離があることを明らかにしました。

学びから得たこと・身につけたこと

今学期は、地方自治体が直面する移住に関する課題に着目し、移住希望者を対象とした調査を実施しました。インタビュー調査の準備では、分析に必要な情報を取捨選択し、分かりやすく伝わる質問を作成する力を養いました。また、京都や東京で開催された移住フェアでのインタビュー調査を通じて、既存の統計データでは見えてこない移住希望者の生の声を聞くことができ、定性調査の重要性を実感しました。

佐藤寧来

移住施策を学ぶ中、地域ごとに異なる課題や取り組みがあることを知り、視野が広がりました。行政の施策だけでなく、住民や民間企業の関わりも重要だと実感しました。実際に移住者の方々や自治体の担当者にお話を伺うことで、統計データだけでは分からないリアルな声を聞くことができ、フィールドワークの重要性を改めて認識しました。ゼミ活動を通じて、単なる学問ではなく、社会課題を深く考える貴重な機会になりました。

三木日菜子

フィールドワークを通じた地域課題へのアプローチ

教員名 小山元孝



学修のねらい

本演習はフィールドワークを通じて地域課題を発見し、その解決に向けた調査・研究の初歩的なスキルを身につけることが目的でした。前学期は豊岡市出石町を対象に、過去の文献などから自ら調査計画を立案し、現地での調査を行いました。具体的には出石焼や出石そば、城下町など、地域の歴史を踏まえたテーマが取り上げられ、自らの体験や聞き取り調査をもとにした調査報告がありました。後学期は自ら調査地を選定し、前学期と同様に文献講読、調査計画の立案、現地調査を行いました。いずれも理論的な研究と現地での実践を交え、両者をバランスよく身につけることに留意しました。この他、京丹後市で開催されている「こまねこまつり」への参加、またまち歩き企画「てくてく我がまち再発見・こまねこウォーク」では参加者のアattend役として参加するなど、地域住民との協働により企画・運営に参画しました。

学びから得たこと・身につけたこと

地元である福井県小浜市でフィールドワークを行いました。自分自身が案内役となることで新たな発見ができた、また他地域の人と行くことで印象の違いを楽しんだりすることができました。地元の改善点や強みを伸ばしていく点はあると感じますが、客観的に地元を見ることができていい経験となり、これから様々な地域を見ていきたいと感じました。

杉本晃都

フィールドワークで御食国若狭おばま食文化館を訪問しました。ここは、小浜市の食文化や伝統工芸品をはじめとした地域の魅力を伝える良い施設だと感じました。また食文化に関連して、食品ロスの問題を学ぶことができる展示も良いのでないかと考えました。食品ロスは非常に深刻な問題であると思いますし、キッチンスタジオがあるので、廃棄が少なくなる野菜の切り方などの体験講座を開催することを提案してみたいと思いました。

木下真帆

観光地域づくりの観点から海の京都観光圏を考える

教員名 佐藤 充



学修のねらい

本演習は、観光分野の学術的な文献から理論的な枠組みを学習し、海の京都観光圏を対象にして、観光地域づくりの現状と課題を理解するものです。

一年間を通して、文献輪読による理論学習だけでなく、フィールドワークにも取り組んでもらうことで、海の京都観光圏内における観光地域づくりの現場での経験も大切にしました。「理論」と「実践」を往還させ、知識だけでなく、経験だけでもない、両者を結び付ける学びを重視しました。

地域協働の観点からは、フィールドワークにおいて、京丹後市の夕日ヶ浦観光協会と伊根町の観光関連事業者と連携したプロジェクトを実施しました。2・3年生の合同チームを作り、地域住民と観光客向けのイベントへの参画、公式SNSを活用したデジタルマーケティング、観光者向けのお土産づくりを行いました。

学びから得たこと・身につけたこと

今年度のゼミ活動では、文献講読とフィールドワークを通じて観光について学びました。文献講読では、観光の現状と課題について幅広く学べました。フィールドワークでは、伊根町のお土産づくりに取り組み、観光客層の分析を行い適切な商品案を考える重要性を実感しました。また、デザイン案を考える際には、伊根町の主な観光客層である外国人観光客が好むデザインを調べ、より良い商品開発に取り組む重要性を学べました。

野崎日奈樹

今年度のゼミでは、グループワークと文献購読を行いました。グループワークでは、新たな企画を考えるなど、主体的に行動する場面が多く、以前よりも何かに取り組む意欲や考え方が変わりました。文献購読では、さまざまな角度から物事を見ることが大切であると感じました。また、司会進行役を務めた際には、自らの考えを相手に分かりやすく伝えることが難しかったので、これからの課題にしていこうと思いました。

尾崎煌生

問題意識をもって学修に勤しむ

教員名 佐藤 恵



学修のねらい

平素から問題意識をもち、かつ自ら考える力の習得を最大の課題としました。そのため、興味をもった新聞記事を他のゼミ生に紹介する機会を定期的に課しました。こうした発表は、自らの考えをまとめ、それを人に伝える訓練の場として設けられました。

学生には、興味のある領域と問題意識をもとに、関連文献のreviewを学ばせました。学生は、得られた知識から概念の整理と構造化に取り組みました。その成果は、成果発表用ポスターとしてまとめられました。これは、次年度以降に必要な研究の作法を学ぶ場となっています。

医療福祉経営学科の学生として基礎的な知識を確認するため、川崎医科大学附属現代医学教育博物館を訪問しました。展示された数々の標本や機器の操作を通じて、医学知識の定着がなされました。

学びから得たこと・身につけたこと

私は1年間のゼミ活動を通して、興味を持った貧困について先行研究のレビューを行いました。先行研究を読む中で、貧困の定義が研究者によって異なり確立されていないことに気付きました。その後先生のアドバイスの下、先行研究を比較調査し、貧困の定義の構造化に取り組みしました。また、貧困の先行研究を他のゼミ生に紹介する活動を行いました。その活動は物事に問題意識を持つことと自分の考えを他者に理解できるよう伝える訓練になりました。

山渡亜季

多様性のある社会について考える：異文化理解の視点から

教員名 渋谷節子



学修のねらい

文献購読及びディスカッションと地域でのフィールドワークにおける実践、個別研究を通して、文化・社会の多様性について異文化理解の視点から考え、自らの研究を通して多様性のある社会作りについて、その難しさや課題も含めて考察を行います。具体的には、①異文化理解を実践し、文化・社会の多様性について考えるフィールドワーク、②バックボーンとなる異文化理解や文化・社会の多様性に関する文献購読、③文化・社会の多様性について自ら関心があるテーマの個別研究の3つを行い、日本や世界の多様な文化を学びながら、地域の外国人留学生との共同学習等を通して異文化理解の難しさや多文化社会の課題と解決策について自ら考える力を育てます。より豊かな地域社会を作る上で文化・社会の多様性がいかなる役割を果たすのか、多様性のある社会を実現する上での課題は何か、どのように課題を乗り越えていくことができるかを、理論と実践の両面から考えます。

学びから得たこと・身につけたこと

私はこの一年を通してさまざまな学びを得ることができました。個人研究では特攻隊について調べ、これまで見えてこなかった事実や背景を知ることができました。また、教科書を用いたグループディスカッションを通じて、異文化理解の視点を深め、これまで気づかなかった視点や考え方に触れることができました。次年度以降は、文化や社会の多様性に関する理解をさらに深め、異文化理解の視点を一層広げていきたいと考えています。

荒井晴海

フィールドワークを通じて異文化理解を実践し、伝えることの難しさを実感しました。また、文献購読やディスカッションを通じて異文化理解を深く考察し、自分自身の体験を振り返る機会を得ました。さらに、多文化社会への具体的な取り組みに関心をもち、個別研究では在留ベトナム人の増加要因や課題、解決策を探究しました。これらの経験を通じて、異文化理解や多文化社会を理論と実践で学ぶことができました。

南 慶明

1人1プロジェクトリーダー制による産学公NPO連携！

教員名 杉岡秀紀



学修のねらい

地域経営演習Ⅲ・Ⅳでは、文献購読で専門の基礎を固めつつ、近隣の自治体・企業・NPO等と連携しながら、PBLに取り組みました。

文献輪読は、宇都宮浄人ほか『まちづくりの統計学』と秋吉貴雄『入門 公共政策学』の2冊を輪読。

PBLは、①5大学インゼミ(岩手県立大・神戸大・京都産業大・新潟医療福祉大・本学)・LINKtopos、②高大社連携研修事業(京都中小企業家同友会)、③主権者教育(丹波市議会)、④高校生みらい会議(京都府北部地域連携都市圏形成推進協議会)、⑤綾部ちいたにプロジェクト(志賀郷ゴキゲン化計画)、⑥万博プロジェクト(Expo kyoto)、⑦政策コンペ(大学コンソーシアム京都「京都から発信する政策研究交流大会、京都府警察「ポリス&カレッジ」)などのプロジェクトを1人1プロジェクトリーダー制で進めました。

学びから得たこと・身につけたこと

ゼミ活動を通して、企業の方、高校生、地域住民など多くの方々と関わりを持てたことは貴重な経験でした。この1年間で地域に出て行くことの楽しさを感じるようになりました。私は主権者教育のプロジェクトリーダーを務め、「丹波市議会☆ミライプロジェクト」の高校生の伴走に加え、SNSでの発信を行いました。活動をするなかで選挙の重要性を感じ、また、議員さんとの交流を通して議員さんのイメージも変わりました。

片桐彩花

ゼミ活動からは、計画性や柔軟性等幅広く成長できたように感じます。私は大学連携事業を担当し、以前から興味があった他大学の学生との交流を楽しみつつ多くのことを学ぶことができました。事業の運営として携わる上では先輩方から学ぶことが多く、次年度に向けての意欲も高まりました。ゼミをきっかけに参加したライフセーバー活動でも得るものが多く、今後もこの環境を活用し、関心がある活動には積極的に参加したいと思います。

前田海翔

災害と防災に関する地域実践に向けて

教員名 大門大朗



学修のねらい

本演習では、地域社会に大きな影響を与える「災害」がもたらす様々な課題について、社会学や社会心理学(グループ・ダイナミックス)の立場から実践的にアプローチできるようにすることを目指しました。前学期では、まず、防災・減災に関する文献の輪読やミュージアムへの訪問を中心として、防災・減災に関する基礎知識を学び、災害がもたらす地域への影響や、災害情報や防災教育の批判的側面について学びました。後学期からは、各自の関心に合わせて、福知山市内でのフィールドワーク、能登半島地震被災地への訪問などを通して、地域への影響について調査・情報収集、実践活動を行い、より具体的な災害や防災に関する理解を深めました。これらの地域での実践活動をもとに、グループ・ダイナミックスの立場から、事例や活動をまとめ、災害・防災がもたらす地域への意味について理解を深めました。

学びから得たこと・身につけたこと

私は、能登半島へボランティアに行きました。イベントを開催したり、被災者の方々と話したりする中で、自分が地域の人々を「被災者」と位置付けてから関わっていることに気がつきました。起きた災害についてどう感じているかは、地域の人それぞれで違うはずなのに、何かしてあげなければと決めつけて関わろうとするのは、地域の人にとって失礼ですし、本当に求められていることを見落としてしまう危険があるのだとわかりました。

中川諒治

学びを通して得たことは、文献の輪読で身につけた防災・減災の基本的な知識や考え方と、能登半島でのボランティア活動を通じて得た現場の経験です。特に、被災地を実際に目にすることで災害の恐ろしさを実感し、戸別訪問で被災された方の生の声を聴く中で、共感や寄り添うことの重要性を深く理解しました。これらの経験を通じて、理論と実践を結びつけ、防災の重要性をより深く認識することができました。

荒内謙伸

地域と協働しよう。 小さな社会実験を やってみよう。

教員名 谷口知弘



学修のねらい

谷口ゼミでは、多様な価値観を持った人々が機嫌よく暮らせるまちづくりを目指して実践的研究を行っています。

2回生ゼミでは、まちづくりの理論と技法の基礎的な力を身につけるために演習と地域との協働実践を行いました。

前学期から福知山ワンダーマーケットに参画し、観察(オブザベーション)→発想(アイディエーション)→試作(プロトタイピング)のプロセスを体験的に学びました。後学期は、関心のテーマに集って2つチームをつくり地域と協働するプロジェクトを実施しました。地域の関係者を巻き込んだ小さな社会実験を計画・実践し、実践力を身につけました。

PJ1) 若者×まつり つながるプロジェクト_「まつりと若者つながるガイドブック」制作

PJ2) ふらっとベビースペースプロジェクト_授乳とおむつ替えスペースの実験と提案

これらの活動は「まちかどキャンパス吹風舎（ふくちしゃ）」を拠点に地域と関わり試みました。

学びから得たこと・身につけたこと

私は、福知山市の祭り・イベントに若者の担い手を増やしたいという思いから、祭りの認知度向上を図るための活動を行ってきました。この活動の中で、私は主体性の大切さを学びました。人に物事を伝えるときは自分が体験しなければ伝えることができないことに気づき、自分は伝えるための行動ができていないことを痛感しました。

上廣萌久

ゼミ活動を通じて地域の祭りやイベントに参加し、多様な視点に触れる中で地域活性化の重要性を学びました。福知山市内で「ふらっとベビースペース」を設置し、子育て中の保護者からの声を受けて、地域のニーズに応える重要性を実感しました。課題解決力やチームで協力する力を養うことができ、市役所への提案を目標として社会貢献の実感も得ました。これらの経験を通じて、社会とのつながりを大切に、実践を通じて成長できました。

金子創士

農産加工品の市場 拡大に必要なもの はなに？

教員名 張 明軍



学修のねらい

本研究室では、「京都中丹いちおし商品」の市場拡大に向け、デジタルマーケティングとAI技術の活用を進めました。公式ホームページとSNSを活用し、商品の魅力を発信するとともに、アクセス情報の分析を行いました。また、福知山市・綾部市・舞鶴市を中心にイベント出展を行い、試食提供やアンケート調査を実施しました。来場者からは「京都中丹の自然を感じる味わい」など好意的な意見が寄せられ、学生が販売に関わることで信頼感が増すという評価も得ました。デジタルマーケティングの導入により、消費者との直接的なコミュニケーションが活性化し、商品の認知度が向上しました。さらに、700件のアンケート回収を通じて、地域住民の具体的なニーズを把握しました。今後はこれらのデータを基にマーケティング戦略を構築し、地域経済の活性化を目指します。

学びから得たこと・身につけたこと

ゼミ活動を振り返って、中丹いちおし商品の販売に力を入れていました。様々な会場で多くの層をターゲットに販売を行い、どのような商品がどの層にヒットするかや、どのような売り方をしたら売れやすいかなど、販売員の基礎的な部分を知ることが出来ました。ゼミ活動を通して地域の人との関わりを持つことや、地域の活動に参加することが出来た良い機会だったと思います。これからも地域に触れて様々な知識を取り込んでいきたい。

浦田彩花

私は地域経営演習Ⅲ、Ⅳを通して中山間地域の農産加工品の実情について学ぶことができました。私たちは、主に販路拡大のための委託研究を担いました。その際幾つかのイベントに参加させていただいたのですが、実際の地域の認知度が低く説明から入らないといけない場面が多かったため、商品毎の説明に割ける時間が少なかったのです。私はこういった実情から、地域のPR活動も行っていくことが大切だなと感じました。

柳瀬大勇

交流観光等による 多自然圏(非大都市 圏)の地域活性化

教員名 中尾誠二



学修のねらい

- ・4/20～21福知山市三和町の古民家宿「旅籠あぶらや」
- ・7/6～7豊岡市但東町の古民家一棟貸宿「Kazabi〜風日〜」
- ・11/7～8豊岡市但東町の改装中民家で全員が「宿泊」調査、
- ・8/3～4福知山市夜久野町の「大峠公民館」で5人
- ・11/23～24富山市の大学生ゲストハウス「泊まれる図書館 寄処 yosuga」で1人
- ・11/29～30兵庫県淡路市の古民家ゲストハウス「Cha ChaCha〜Awaji」で3人
- ・11/30～12/1 徳島県東みよし町の農家民泊「あんちゃんち」で1人
- ・2025/1/25～26 福知山市夜久野町の交流民泊「雲海と星空の宿YAKUNO」で3人
- ・2/28～3/1 鳥取県湯梨浜町の古民家宿「たみ」で2人が宿泊調査
- ・5/3福知山市三和町うぶやの里フェスタ1人
- ・6/2福知山市夜久野町の居母山クラブ田植え会2人
- ・7/13福知山環境会議の由良川SUP会6人
- ・2025/2/8福知山市三和町移住者交流会3人

が「日帰り」参加し、これらを通して各地の様々な取組について学びました。

学びから得たこと・身につけたこと

後学期の活動では「空き家問題」を中心に学びました。この問題の解決には、地域住民が自ら責任を持ち、共に考え行動することが必要であると改めて感じました。空き家所有者の感情的な面にも目を向けながら、地域住民と行政との連携を深めていくことが大切であると実感しました。また、空き家の利活用には、居住空間の提供だけでなく、地域の価値共有や住民同士のつながりの強化が不可欠であると学びました。

石原小友音

福知山の夜久野や三和だけでなく、兵庫県の豊岡市但東町や淡路島など福知山外の地域でもフィールドワークを行いました。地元を出て大学に通う私にとって、移住された方の「田舎には隙間がたくさんある」という話が印象的でした。何も無いからこそ、何でもできる良さが田舎にはあります。話の中で地域への愛情が私にも伝わり、このような地域へ誇りを持ち、地域の良さを伝えていく人が地域にとって必要だと感じました。

保志岩柚葉

教育(特に学校経営) における多様なテー マに関する基礎理解

教員名 福畠真治



学修のねらい

学校経営に焦点を当て、その概要や特質・直面している課題などを、主に文献調査を中心に学習します。加えて、教育関係者と直接対話する機会を設け、教育機関・学校組織の現状について包括的に理解していくことを目指します。そして、その中で得られた知見・課題を、実際の社会にどのように活かすのか、それを考えるための基盤を構築することが、このゼミの目的です。

具体的な取り組みは、以下の通りです。

- ・前学期は、「教育行財政」「学校経営」などに関して、書籍や論文を中心に学習しました。
- ・後学期では、上記学習から学生が自身の関心に合わせて個別のテーマ（「学校教育における食育」「在留外国人に対する教育」「教育と格差」「教育現場へのICT導入」「教科書における戦争記述」「フリースクールの形態」「ESDと大学教育」）を設定し、それらに関する先行研究の整理・フィールド調査などを実施し、その成果をレポート・ポスターにまとめました。

学びから得たこと・身につけたこと

前学期では、座学を中心に複数の教育に関するテーマを討論し、関心を深めました。後学期では、個人の研究テーマについて発展的内容に取り組みました。私はGIGAスクール構想によって、教育関係者の過剰労働は改善されるのかというテーマで、文献調査から国内外の事例も含めた研究の基礎知識を得ました。また、社会問題となっている教員の過剰労働におけるGIGAスクール構想の立ち位置について把握することが出来ました。

藤澤健多

前学期では、ゼミのメンバーが興味のある内容を出し合って、それについての座学を聞きました。

後学期では、関心のある内容を個人で研究しました。私は誰もが教育は平等であるべきだと考え、学校以外での学習のあり方を学びたいと思いました。そのため、フリースクールについての学びに関心を持ち、経営形態や施設の様子、学習の取り組み方などを調べました。また、実際に2つのフリースクールを見学し、学びを深めました。

矢島冴子

病院における情報システムの基礎を病院見学と統合病院マスタ作成で学ぶ

教員名 星 雅丈



学修のねらい

当2年ゼミでは、例年、アカデミックスキルのさらなる向上を目指して医療情報・病院経営にかかわる文献抄読会の実施と同時に、Accessなどデータベースソフトを用いてデータを収集し処理する技術と経験を積んでいます。抄読会では田原・日月「実践から病院情報システムの功罪とそのあり方を考える」(2000年)を取り上げ、医療情報システムの有用性と問題点、および医療に対する複雑系としてのアプローチについて学修しました。研究活動では、星ゼミ4年生の研究を受け継ぎ、医療機関の公表データを統合可能にするための「統合病院マスタ」の作成を行っており、次年度も継続する予定です。学生はこの演習で、データが思い通りの状態で公開されていないこと、手間をかけて処理をしなければ分析などに使うことができないことを学修しました。なお、12月には大阪市内に所在する医療機関の見学を行いました。

学びから得たこと・身につけたこと

地域経営演習Ⅲでは医療情報システムに関する文献から、病院における情報やその質とは何か、また、これから医療情報システムを利用する意味は業務効率化だけでなく、データを利用して病院の医療や経営の質を高めていくことが重要であると学びました。地域経営演習Ⅳでは病院見学を通して、実際に病院で働いている人達をみて、今、自分たちが学んでいる知識が将来どのようなことに繋がるのかを具体的に知ることができました。

学生A（学生氏名非公開）

病院見学では、これまで授業などで学んでいた病院内の仕組みや実際の事務の仕事内容、仕事環境を見学することで目指す将来について明確に考えるようになりました。研究活動では、官公庁が公開しているデータが縦割り行政の影響を受けていることを知り、統合的な病院マスタを新たに作成することの意義を感じることができました。また、精度確認のような地道な作業を行うことが利用しやすいデータにつながることを実感しました。

学生B（学生氏名非公開）

地域経営研究Ⅰ・Ⅱ



日本の上水道事業の持続可能性について

教員名 井上直樹



学修のねらい

わが国における人口減少は、水道事業の経営主体である地方公営企業にとって利用者数と水道使用量の減少を意味しています。このような現状は水道事業の経営基盤に影響を及ぼし、資産管理や問題発生時の対応も不十分になる可能性が考えられます。水道は人々の日常生活に不可欠であり、その経営の安定化は喫緊の課題です。

これらの課題を解決し、日本の上水道事業が持続可能性で安全な経営を行うために、水道の利用者（住民）などステークホルダーとのコミュニケーションが重要です。総務省が地方公営企業に策定を要請している水道事業の経営戦略とそれに関するステークホルダーとのコミュニケーションのあり方を考察するにあたり、IIRC（International Integrated Reporting Council：国際統合報告評議会）が策定した<IR>フレームワークを基にコミュニケーションツールとしての経営戦略を検討します。

学びから得たこと・身につけたこと

前学期では、統合報告についての知識を身につけるために本を読み、統合報告書に必要な要素や使われ方を学びました。実際に作成されているレポートを参考にしながら学習を進めました。また、実際に研究をされている方にインタビューを行い、学んだ知識をより深めることができました。

後学期では、卒業論文に向けて公営企業の会計と経営について学びました。その中で以前から関心のある水道事業に焦点を当てて学びました。公営企業は、地方公共団体が特別会計を設けて運営する事業のため、財政健全化を図るための取り組みをしていることがわかりました。また、フィールドワークとして福知山市の上水道施設への見学も行い、福知山市の水道事業の課題と現状を知ることができました。

来年度は、今年度得た学びをもとに卒業論文として形にしていきたいです。

宮崎夢香

地域課題の発見と解決策の検討

ーゼミ生全員でひとつの研究課題に取り組むー

教員名 大谷 杏



学修のねらい

3年生のゼミでは、学生自らが主に北近畿地域が抱える問題について考え、ゼミ単位でひとつの研究課題に取り組みます。今年も学生が主体となり、「福知山公立大学地域経営学部大谷ゼミKFC班」を結成し、役割分担を決め、先行研究の整理と共に、綿密な計画を立て、6月に神戸市立森林植物園、9月に丹後王国食のみやこへ現地調査に向きました。その成果を「ウエルネスウォーキングとフォトラリーを活用した健康増進の取り組み」と題した論文にまとめ、12月に龍谷大学深草キャンパスで行われた大学コンソーシアム京都主催「京都から発信する政策研究交流大会」で発表しました。内容は、丹後王国国内でのフォトラリー企画を含んだウエルネスウォーキングの提案でしたが、その大会でベスト質問賞を獲得することができました。また、1月には、姫路城を中心としたウエルネスウォーキング案作成のため、福知山と同じ城下町である姫路にて調査を行いました。

学びから得たこと・身につけたこと

3年次では「大学コンソーシアム京都」にて論文を発表できるよう、1年を通しメンバー全員で取り組みました。研究する事柄から、イベントの実施予定場所まで、全てを自分たちで決める過程とその大変さを学びました。これにより研究を行う際の手順や、事前に対策しておくべき事項など、実際に行わなければ見えてこない問題点に気付くことができたように思います。また、大人数で1つの目的を完遂する達成感も知ることができました。

加納優衣

ゼミでは、大学コンソーシアムに向けて「京丹後市における観光振興と健康づくり」をテーマに研究しました。実地調査として神戸森林植物園でのウエルネスウォーキングに参加し、ヒアリングを実施しました。また、丹後王国を訪れ、作成したコースを歩くことで実践的な学びを得ました。情報の選定や意見調整の難しさを実感しましたが、議論を重ねることで新たなアイデアを生み出し、より良い政策提案を完成させる力を身につけました。

村田唯衣

データウェアハウス(DWH)ゼミ

教員名 岡本悦司



学修のねらい

2年生の地域経営演習では、教官が病院データをデータウェアハウスに加工して提供しましたが、3年生ゼミでは学生が任意に選択した公開データ(必ずしも医療データに限定しない)について自らデータウェアハウス化を行う技術を習得します。データウェアハウスとは、検索を目的とするデータベースをExcel上でピボットテーブルで操作できる分析を目的とするものです。ネット上で公開された夥しい統計表の大半はそのままでは操作できません。膨大なデータをネット(e-stat等)からダウンロードし、それをキューブ形式に加工することは一定の技術を必要としますが本ゼミはそうした技術をマスターしたデータウェアハウザー育成を目指します。

学びから得たこと・身につけたこと

「近畿病歴管理セミナー」と「京都から発信する政策研究交流大会」にSMR(標準化死亡比)により評価した病院別の死亡退院率の分析に関する演題で参加しました。分析の際に期待値を求めることに苦戦した場面もありましたが、最終的に論文やスライドを完成させることができました。この活動で身に付けた分析手法やデータウェアハウスの作成方法、考え方を活かしながら卒業論文の作成に励んでいきたいと思っています。

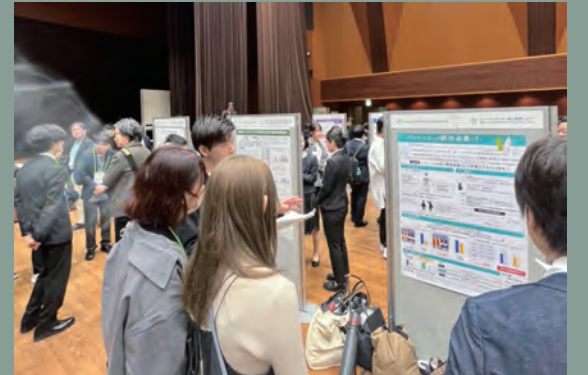
畑山萌伽

前学期はデータウェアハウス(DWH)がどのように作成されるのか、1からその工程を教えていただきました。そして、厚労省が公開するDPCデータをダウンロードし、一つのファイルに保存するまでを年ごとに行いました。後学期は自分たちでDWH化したデータを用いて標準化死亡比についての分析をし、地域ごとに比較することでどの地域で死亡率が高いのかを把握し、その要因を多角的に考察したうえで新たな課題を発見することができました。

千原優里佳

キャリアパスを意識した能力開発

教員名 加藤好雄



学修のねらい

本演習では、前年度の取り組みを発展させ、それぞれの関心に基づいて研究テーマを設定し、文献調査やデータ分析を通じて仮説の検証を行いました。食品メーカーのマーケティングに取り組む学生は、消費者行動や市場動向の分析結果から商品に関する考察を行い、働きやすさを研究する学生は、組織の制度や意識調査から仕事環境の要因分析をしました。これらの調査・分析を通じて、関連分野の基礎理論や分析手法への理解を深めるとともに、実践的なデータ分析力も養うことができました。また、アンケートの解釈では回答者の背景要因を考慮し、多角的に分析を行いました。さらに、本年度は質的情報を補完するために、先行研究との比較も実施し、マーケティング戦略や職場環境改善の方向性に関する有益な示唆を得ることができました。今後の研究では、得られた知見を踏まえた新たな仮説構築にも注力します。

学びから得たこと・身につけたこと

昨年のマーケティングカンファレンスへの参加経験を活かし、卒業研究に向けたテーマ設定と研究のアウトラインの設計を行いました。「食品×感情」のテーマが昨年のカンファレンスの上位賞に共通していたため、「食品×感情」を軸にテーマ設定を進めました。予め食品市場の市場構造レポートや食品メーカーの成功事例などをまとめることで、食品市場の全体とトレンドを掴むことができたので、これを基に卒業研究を行っていきます。

石亀礼菜

社会的に若年層の離職率が高く、企業の人材不足や生産性低下につながる課題と捉えたため、若年層従業員の離職意向に影響を与える要因を明らかにすることを目的に、コンジョイント分析を用いて要因の重要度を評価しました。この研究を通じて、データ分析の手法を習得し、統計的に労働環境が離職意向に与える影響を評価する力を身につけました。また、アンケート設計の重要性を学び、実務的な課題解決の視点を養いました。

牧田明日加

フィールドワークと数値的情報の融合

教員名 神谷達夫



学修のねらい

このゼミの特徴は、2年次に引き続き、学生が望む内容に取り組むことです。同様に、研究分野もあえて限定していません。そのため本ゼミでは多岐にわたる研究が行われています。今年度は、福知山城でのイルミネーションイベントへの参加、楽曲制作とその社会的影響の分析、民泊施設でのイルミネーション装飾、興行における経済効果の考察などを行いました。

本ゼミでは、数値データを含む客観的な分析を重視し、イベント参加を通じて一般性を求めることが重要であると考え、研究に取り組んでいます。

学びから得たこと・身につけたこと

今年度は夕日ヶ浦のキャンドルナイトに参加し、GPSを組み込んだ提灯を用いた行動調査を実施しました。この活動を通じて、データの収集や処理方法について実践的に学ぶことができました。また、神谷ゼミでは個人で自由に研究テーマを設定できます。活動も個人で進めることになるため、主体的に行動する力を養い、スケジュール管理や計画力を向上させることができました。

坂野善一

ゼミ活動を通じて、音楽の持つ社会的・文化的影響を深く学びました。特に、地域活性化や観光促進に与える影響を研究する中で、音楽が感情や記憶に働きかける力を実感しました。フィールドワークでは地域の伝統音楽や祭りの音を記録し、その役割を分析しました。また、グループディスカッションを通じて多様な視点を取り入れる重要性を学び、発表を通じて論理的に伝える力も向上しました。これらの学びは、貴重な経験となりました。

矢野玄樹

企業活動と社会課題ーイノベーションとデザイン思考の観点からー

教員名 亀井省吾



学修のねらい

地域経営研究I-IIでは、イノベーションと社会課題の関係性について、現場フィールドワークのほか、経営者やマネージャーとのディスカッションから実践的に学ぶことを目的にしています。地域経営研究Iでは、独自のテーマから「いい会社」を判別してファンド組み入れを行う独立系投信委託企業を実証事例として「ESG投資と市場評価に関する試論-独立系ファンドの事例分析を通じて-」について考察しました。なお、その成果は、情報社会学会2024年年次研究発表大会WIP部門にて発表し、学会ホームページに論文掲載されています。地域経営研究IIでは、業界第一線で活躍するデザイナーをゲスト招聘しデザイン思考について学び、卒業研究に向けたテーマ設定を行っています。

学びから得たこと・身につけたこと

ゼミでは、学会論文の執筆・発表、デザイン思考講義に取り組みました。学会論文執筆では半構造化インタビューなどの定性分析に加えて、CAPM回帰分析などの定量分析を用いたことで主観・客観の両面から物事を分析する力が身についたと感じています。また、デザイン思考講義は社会課題についての問いを考え、本質的な問いについて考える機会になりました。これらの経験を土台に、4年次の卒業研究に取り組みたいと考えています。

磯崎泰智

ゼミ活動にて、表現力の幅が広がりました。前学期は学会論文の執筆と発表を行い、論理的思考力養うことで、相手を納得させるロジカルな表現が出来るようになりました。後学期にはデザイン思考講義を通して、自らの「問い」について考えを深掘りし、「問い」をどのような「かたち」で表現するべきか学び実践することが出来ました。これらの経験を就職活動や卒業論文執筆など自己表現の場で活かしていきたいと思います。

渡部大陸

現代社会の抱える社会福祉的課題を解決

教員名 川島典子



学修のねらい

本ゼミでは、2年時に学んだ人口減少が著しい北近畿の中山間地域における社会福祉的課題を解決する方法をめいめいが更に探求する学びを深めました。あるゼミ生は、昨今、話題になっているビジネススクエアアについて研究し、あるゼミ生は、能登半島に災害ボランティアに行ったことを契機に福祉防災に関する研究を行いつつあります。また、あるゼミ生は中間支援組織による社会福祉の実現について調べたりもしました。フィールドワークにも出かけています。具体的には、昨年招いたデンマークからのゲストから学んだ、デンマーク発のノーマライゼーションの概念を実現している豊中市のインクルーシブ教育の視察に行きました。また、福知山市の治水会館も訪ねています。その他、来年度の卒論作成に備えるために、前学期はアカデミックライティングに慣れ、章立てを学ぶための輪読を行い、後学期は卒論のテーマに沿った本を1冊選び、輪読する学習も行いました。

学びから得たこと・身につけたこと

私たち川島ゼミでは、主に社会福祉について学んでいます。輪読やフィールドワークを通じて、多角的な視点から福祉を考察し、4年生での卒業研究に備えました。私は能登半島地震の災害ボランティアに参加した経験をきっかけに、卒業研究では「福祉防災」をテーマに研究を進めたいと考えています。福知山市の治水記念館にフィールドワークで行って福知山の水害の歴史を学んだりもしました。フィールドワークと輪読の双方から卒論作成のために必要なことを身につけることができました。

石田浩祐

私が所属するゼミでは、前学期に輪読を行い、指定された本を各自が章ごとに担当して発表しました。後学期には、卒業研究に必要な本を選定し、その選定した本の要約を発表しています。広い教室で、大きな声で発表することを通して、自信を持って話すことなどの基礎的な話し方の重要性を学びました。また、卒業研究に関連する本を要約して発表することで、他のゼミ生にもわかりやすく伝えるための工夫をし、自分自身の理解を深めることができました。さらに、フィールドワークでは、豊中市などに行き、インクルーシブ教育などについて学びました。今まで知らなかった福祉の分野のお話を伺うことができ、とても貴重な体験を得ることができました。この経験は、実際の福祉の現場の重要性を理解する機会となりました。

本木天満

持続可能な地域運営組織のあり方に関する研究

教員名 木村昭興



学修のねらい

本演習は、地域コミュニティを構成する民間企業の経営状況を把握し、会計の視点から行政の役割について学ぶことが目的です。具体的には、①財務会計の仕組みと、②財務情報や非財務情報の定量的・定性的分析手法に焦点をあてます。①では、財務会計の情報提供機能を理解し、プレゼンテーションスキルの向上を目指しました。②では、分析手法を学び、インタビュー調査を通じて地域の課題を把握しました。今年度は、持続可能な運営に向けた地域運営組織のあり方をテーマに設定し、地域運営組織の機能とそのガバナンスのしくみについて考察しました。その考察を踏まえて、明石市、川西市、三田市へのフィールドワークを行い、地域運営組織の事例分析を実施しました。その結果、持続可能な地域運営組織を形成するためには、継続的な地域計画の見直しと、行政から自立した財政運営が必要であるとの結論を導きました。

学びから得たこと・身につけたこと

今学期は主に、インタビュー調査を通じて、地域運営組織の先進事例を調査しました。限られた時間の中で必要な情報を引き出し、相手が話しやすい話題を提起することに注力しました。事前調査で得た情報を深掘りし、実態を確認することの大切さを学びました。この経験は、現在取り組んでいる就職活動に活かすことができ、大変有意義でした。今後もこの学びを活かし、多角的で客観性のある卒業研究につなげていきたいと考えています。

花谷 歩

地域資源を活かした 住民との協働活動

教員名 小山元孝



学修のねらい

本演習では、京丹後市峰山町で開催される「こまねこまつり」を通じ、住民と学生との協働により地域資源の活用手法を検討し実践することを目的に行いました。この「こまねこまつり」は、金刀比羅神社に石製の狛猫が奉納されていることから、ネコと丹後の特産品である丹後ちりめんをキーワードに2017年から始まったイベントです。一昨年度から参加をしており、本年度はその関連行事の一つ「てくてく我がまち再発見・こまねこウォーク」においてアテンド役として参加するほか、丹後ちりめんを使ったガイドブックの作成や菜作りワークショップの開催、またケーブルテレビの番組制作などに携わりました。参加者からはガイドブックのデザインが洗練されていていい仕事だと思ったという感想や、学生との交流が印象に残ったという声もありました。

学びから得たこと・身につけたこと

まち歩き企画では、去年と違い用意されている企画に乘るのではなく「ものづくり」というテーマを決めたり、2回ほど実行委員の会議に参加したりと構想の段階から参加しました。後輩たちのサポートをして打ち合わせを行うなど、去年とは桁違いに疲労感と終わった時の満足感がありました。下級生のサポートや、参加者との会話、地元の関係者との調整など自分でも驚くくらい成長を実感しました。

寒竹尚也

まち歩き企画には初めての参加となり、初めはなかなかお客さんと話しにくい部分がありましたが、徐々に慣れてきて色々な人と話すことが出来ました。その中で、普段よく車で通る道ですけど、歩いてみると車からの景色とは大きく違っていて驚いたという話があり、私自身もすごく同感できました。多くの方と話せたことが、コミュニケーションが苦手な私にとっては収穫になったと思います。

山口 弦

観光地域づくりを巡る 諸問題を考える

教員名 佐藤 充



学修のねらい

本演習は、卒業研究の成果物（論文）を作成するために、学術研究のデザインとプロセスを学習し、自らの問題意識に立脚した研究計画の策定・実施するものでした。

一年間を通して、各学生は研究デザインに関する文献を読み、主に観光地域づくりに関する問題意識に基づいて、先行研究のサーベイや既往調査のデータの収集・分析に取り組みました。特に重視したのは、それぞれの学生が自らの問題関心を突き詰めて、「学術上の問い」を導き出すことでした。

地域協働の観点からは、フィールドワークにおいて、京丹後市の夕日ヶ浦観光協会と伊根町の観光関連事業者と連携したプロジェクトを実施しました。2・3年生の合同チームを作り、地域住民と観光客向けのイベントへの参画、公式SNSを活用したデジタルマーケティング、観光客向けのお土産づくりを行いました。

学びから得たこと・身につけたこと

伊根町でのグループワークでは、商品売り場でのお客さんの行動を観察し、陳列方法の改善やポップの作成を行いました。自らの活動を紹介するSNSアカウントの立ち上げにも取り組みました。また、卒業論文の作成に向けて、隔週での指導教員との面談を通して、興味のあるテーマについてのデータ収集、分析などを作成に向けて進めていき、ゼミ内で行う報告会において進捗状況や研究のスケジュールについて共有しました。

安東優人

夕日ヶ浦の取り組みでは、計画を入念に立ててから、イベントやSNSの運営に関わりました。その際には、チームで取り組む難しさや必要性も学びました。一人では達成できないことも仲間と一緒に取り組むことで、自分の成長にもつながられました。また、卒業論文の作成では、インタビュー調査の前に、聞き取り先の概要や課題を調べ、何を知りたいのかを明らかにさせてから話を聞くことで、より一層理解を深めることができました。

小林夏希

多様性のある社会 と課題を考える： 異文化理解の視点から

教員名 渋谷節子



学修のねらい

文献購読及びディスカッションと地域でのフィールドワークにおける実践、個別研究を通して、文化・社会の多様性について異文化理解の視点から考え、自らの研究を通して多様性のある社会作りについて、その難しさや課題も含めて考察を行います。具体的には、①異文化理解を実践し、文化・社会の多様性について考えるフィールドワーク、②バックボーンとなる異文化理解や文化・社会の多様性に関する専門的文献の購読、③文化・社会の多様性について自ら関心があるテーマの個別研究の3つを行い、日本や世界の多様な文化を学びながら、異文化理解の難しさや多文化社会の課題と解決策について自ら考える力を育てます。より豊かな地域社会を作る上で文化・社会の多様性がいかなる役割を果たすのか、多様性のある社会を実現する上での課題は何か、どのように課題を乗り越えていくことができるかを理論と実践の両面から考え、卒業研究に繋げます。

学びから得たこと・身につけたこと

私がゼミを通して学んだことは、大局的な視点を持つことの重要性です。人間の行動や感情、歴史上の出来事など一見突発的に起きているように見えることでも、必ず背景や理由があることを知りました。自分の快・不快ではなく、知識と想像力を持ち、その場で最適な行動を取る用意があることこそが、異文化理解と言えるのではないかと考えました。このような考えを深める機会をいただけたことを、非常に有意義だと感じています。

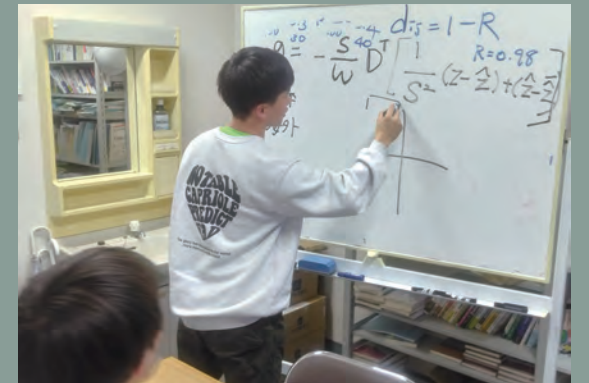
西村千陽

私は、ゼミ活動を通して主体性と異文化を尊重する意思を学びました。個別研究では興味のある分野について研究目的を立て、一から研究を進めるため、時には苦労しながらも自分の方法で研究を進めることで、主体性を身につけることができました。また、日本語学校と共同学習する機会を通し、本を読んで学ぶだけでなく実際に異文化に触れる経験を得ることで、一段と異文化による多様性への関心・尊重する意思を育むことができました。

宮本郁美

文理融合型経営学 の深化

教員名 鄭 年皓



学修のねらい

本演習では、「地域経営演習Ⅲ・Ⅳ」の延長線で、「文理融合型経営学」の知識を深めています。「地域経営研究Ⅰ」では、経営戦略・ビジネスモデル・マーケティング・経営組織論等といった問題に対して、関連した専門書や論文を読むとともに、多変量解析の諸アプローチやマルコフ連鎖のような計量的分析を学習しています。「地域経営研究Ⅱ」では、前期の内容を深化させた内容を学習しています。これにより、豊かな発想力と鋭い分析力を兼ね備えた文理融合型人材の育成をめざした教育活動を展開しています。

学びから得たこと・身につけたこと

2年次から引き続き、経営学書籍を要約することで、経営戦略と企業の倒産理由について理解することができました。また、英語論文からアカデミックな英語に対する知識を深め、授業で学ぶ分析手法についてより深く理解しました。さらに、卒業論文のテーマや構成についてのフィードバックを行ったことで、卒業研究で使用する研究手法や先行研究を集め、自身の論文に対する論理展開を学ぶことができました。

本演習では、「地域経営演習Ⅲ・Ⅳ」で学んだ内容を発展させた、主成分分析やマルコフ連鎖・ロジスティック分析といった、実際に社会で生かすことのできる分析と考え方の基礎を学びました。これらは、文字式だけでなく、数値として実際にデータを基にした演習を行ったことで、それぞれの目的と特徴を実際に感じる事ができました。さらに、演習内で理論を説明することによって、より深い学びとなりました。

三島慶次郎

1人1プロジェクト リーダー制による産 学公NPO連携Ⅱ

教員名 杉岡秀紀



学修のねらい

地域経営研究Ⅰ・Ⅱでは、文献購読で専門の基礎を固めつつ、近隣の自治体・企業・NPO等と連携しながら、PBLに取り組みました。

文献輪読は、Y・バーダック『政策立案の技法』と今井照『地方自治講義』の2冊を輪読。

PBLは、①5大学インゼミ（岩手県立大・神戸大・京都産業大・新潟医療福祉大・本学）、②高大社連携研修事業（京都中小企業家同友会）、③高校生みらい会議（京都府北部地域連携都市圏形成推進協議会）、④舞鶴プロジェクト（東舞鶴商店街・舞鶴市）、⑤宮津プロジェクト（島崎ちしや）、⑥学会発表・政策コンペ（日本地域政策学会、京都から発信する政策研究交流大会、ボリス&カレッジ）、⑦全国公立大学学生大会（LINtopos）などのプロジェクトを1人1プロジェクトリーダー制で進めました。政策コンペでは優秀賞や特別賞を受賞し、結果を出すことができました。

学びから得たこと・身につけたこと

今年度も、舞鶴、宮津、綾部、京都市、雲南市など、地域を飛び出し活動をしました。

印象深いのは主権者教育の一環で取り組んだ政治家の皆さんとの「ユースフェスティバル」や「京都から発信する政策研究交流大会」での優秀賞受賞になります。福知山にとどまらず、地域活性化の影響を様々な地域に波及させることができたのではないのでしょうか。今後は卒業論文を進めていきたいと思います。

阿川ねね

私は2年間舞鶴地域活性化プロジェクトのリーダーを務めました。このプロジェクトでは、昨年度からの継続事業である地域PAY導入のための検討会、そして今年度から公共施設マネジメントについて取り組んでいます。これらプロジェクトを通して、頭でっかちで考えるのではなく、相互理解のためには地域住民の方との対話が重要であることを学びました。

田中敬護

グループ・ダイナ ミックスの立場から 災害と防災を考える

教員名 大門大朗



学修のねらい

本講義では、社会心理学（グループ・ダイナミックス）から理論的にアプローチし、地域社会に大きな影響を与える「災害」がもたらす様々な課題についてそれぞれの関心を深めました。前学期では、グループ・ダイナミックスの基礎的な理論を学習しながら、各自の関心に沿って、論文やフィールドワーク報告を行い、学びを深めました。後学期からは、福知山市内でのフィールドワークに加えて、各自の関心に応じて大規模災害の被災地（令和6年能登半島地震、熊本地震、東日本大震災）へ訪問しました。得られた知見について、各自のテーマに沿って、調査・情報収集、実践活動を行い、グループ・ダイナミックスの立場から研究論文を執筆することに挑戦しました。

学びから得たこと・身につけたこと

私はボランティア活動や避難訓練へ参加を通して防災への考え方や実際に活動に参加することによる新たな気づきを得ました。9月に能登半島でボランティア活動を行い、復興していない状況や支援が行き届いていない現状を知りました。また、一年を通して福知山市が行っている要支援者の避難訓練に参加させていただきました。福知山市の水害に対する避難計画の運用を体験し、その有効性や課題点を考えました。

下仮屋好亮

現在行っている研究の一環として、12月に熊本県益城町でフィールドワークを行いました。熊本地震・平田震災遺構保存会の方々から熊本地震の震災遺構の説明を受け、地域の活性化を図りながら震災遺構を保存活用し次世代に継承していく方法を議論しました。震災遺構は解体か保存かで意見が割れることがありますが、益城町平田地区は多くの人に被害状況を知ってほしいという強い思いで活動されていることがわかりました。

佐々木乃愛

まちをもっと楽しく面 白く。コミュニティを デザインしよう。

教員名 谷口知弘



学修のねらい

谷口ゼミでは、「コミュニティデザイン」を旗印に、多様な価値観を持った人々が機嫌よく暮らせる地域社会をつくるための理論や技法を開発する実践的研究を行っています。

3年生ゼミでは、問題発見から解決に至る協働型デザインプロセスを企画・運営しプロジェクトマネジメントやファシリテーションの実践能力を身につける実践活動を行ないました。共通の関心で集うチームづくりから始め、次の3つのプロジェクトを実施しました。

PJ1) ちょこっと防災プロジェクト～子どもへの防災教育で家庭内の防災意識を高める。

PJ2) びくぶくプロジェクト～「絵本」で交流の場を創出する。心を豊かにする。

PJ3) Cyc_Linkプロジェクト～3C、アップサイクルで物を繋ぐ、人を繋ぐ。

これらの活動は「まちかどキャンパス吹風舎」を拠点に地域と関わり、大学と地域を往還して理論と実践の架橋を試みました。

学びから得たこと・身につけたこと

絵本を用いた交流の場づくりを目的に、市内いくつかの団体の協力も得ながら活動を行いました。昨年より積極的かつ主体的に現場を訪れ、情報収集や見学を数多く行った結果、人脈も広がり、自分たちに今後必要となるスキルや活動方針についての手がかりを得ることができました。また、自分たちの活動目的や展開について説明する機会が多かったことから、プレゼンテーションや関係構築などのスキルも身につけることができました。

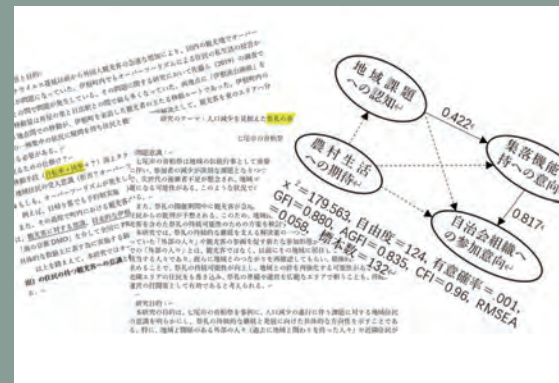
竹田千晴

「アップサイクル×交流」の取組として、自治体等への調査やワークショップを実施しました。昨年とは違い、今年は地域の方々と共同の企画に踏み出したことで活動の幅が広がり、幅広い視野を持って活動できました。特に現地に出ることでしたか得られない可能性の多さを体感できました。今後は、身近に隠れる再利用可能物を地域で生かす可能性について地域でのワークショップを通してさらに深めていきたいです。

栗原乃愛

議論と実地調査を 重ねて卒業研究の 計画書を立てよう

教員名 張 明軍



学修のねらい

年間30回にわたるゼミを通じて、ゼミ生たちは卒業論文の研究計画について議論を重ねました。特に、①観光まちづくりとオーバーツーリズムの解決、②地域伝統文化の継承に伴う運営組織規模の拡大、③地域住民の課題認知と農村生活への期待の関係性の三つのテーマを中心に検討しました。各自の研究テーマに基づき、研究の意義や目的、方法を具体化し、実行可能な計画へと落とし込みました。特に仮説設定や調査対象者の選定については、ゼミ内で活発な意見交換が行われ、論理的に整合性のある研究計画を構築する難しさを実感する場面もありました。しかし、このプロセスを通じて、論理的思考や調査手法の理解が深まり、4年生での卒業研究に向けた準備が着実に進みました。今後は、それぞれの研究をさらに発展させ、地域社会の課題解決に貢献できるよう取り組んでいきます。

学びから得たこと・身につけたこと

今年の研究室の活動を通じて、現地に足を運ぶ重要性を学びました。伊根町の観光協会の方への質問では、観光客と住民の関係について伺い、その土地特有の事情を知ることができました。また、アンケート配布にも携わり、地域住民から確かな情報を得るために資料を十分に理解し、丁寧に説明することを心掛けました。初対面の方に直接アンケートを渡すのは初めての経験で困難もありましたが、大変貴重な学びとなりました。

遠藤優斗

私たち3年生は、自分たちの卒業研究について議論を重ねました。昨年度に決めたテーマを基に、研究の意義や目的、方法を具体化し、実行可能な形に整理しました。また、仮説モデルの検討も行いましたが、議論が進むにつれ、論理的に整合性のあるモデルを構築する難しさを実感しました。こうした経験を通じて、論理的思考や研究方法を学び、今後の研究活動に生かしていきたいと考えています。

谷内直輝

交流観光等による 多自然圏(非大都市 圏)の地域活性化

教員名 中尾誠二



学修のねらい

まず年度当初、全員での「宿泊を伴ったフィールドワーク」実施により「現地を訪問して行う聞き取り調査」能力の向上を図りました。その後、各自が設定した研究（手法：文献調査・参与観察・聞き取り調査）を進めることで進路への動機付けが深化を狙いました。研究テーマは以下の通りです。

有賀 溪 粋：姉妹都市地域における連携と地域活性化の関係性
五十嵐 玲 奈：埼玉県 3 市（入間・飯能・日高）と兵庫県豊
岡市の空き家対策の比較

小島知也：農泊を通じた自治体の社会的な持続性についての考察

白井郁人：学生と地域社会の関係性についての考察

田中大成：空き家の利活用から考える小学校の統廃合問題
友塚絢人：京都府の観光地域づくり法人(DMO)と教育体験旅行

安井勇渡：災害対策とその必要性についての考察

渡部夢生：中山間地域における生活環境の維持・継承に向けた地域体制の在り方

学びから得たこと・身につけたこと

私は当研究室での活動で、昨年より多くの地域の魅力や課題を見つけることができました。北近畿の自治体のみにとどまらず、今年は京都府内や鳥取県、東京都でも調査を行うことができました。これは、多くの方と繋がりの中で広がっていった結果ではないかと考えました。その中で各地域の特色や違いを分析しつつ、地域との繋がりも大切にしながら来期は卒業研究を進めていければと考えています。

友塚純人

本年度は、一人ひとりが自分の興味・関心に沿って活動に取り組みました。研究活動におけるヒアリング調査や参与観察、アンケート調査では調査対象の選定やアポ取り等、全て自身で行いました。また、調査で得たことは仲間と共有し、議論を交わしました。そのため、知識だけでなく「定めた問いに従って調査をする力」、そして「他者に自分の意見や考えを伝える力」を養うことができました。来年度も意欲的に活動していきたいです。

渡部夢生

教育(特に学校経営)における多様なテーマに対して、独自の視点で捉え研究する

教員名 福嶋真治



学修のねらい

学校経営を主軸としながら、「地域との連携」・「チームとしての学校」にまで射程を広げ、その概要や特質・直面している課題などを学習した上で、実際に自身の関心に合わせたテーマを設定し、文献／実地調査を行います。そして、その結果を基に、実際に教育を軸に地域社会を活性化していくための条件を探ることが、このゼミの目的です。

具体的な取り組みは、以下の通りです。

・論文執筆に必要なアカデミックスキルに関する学習を行うつつ、学生自身のテーマ（「中学校におけるキャリア教育」「特任教員の業務への生成AI導入」「高校教育とウェルビーイング」「SC－教員－保護者の連携」「日本におけるLGBTQ＋教育」「高校におけるシティズンシップ教育」「教員の労働環境における海外と民間事例比較」「フリースクール形態の類型化」）に関する先行研究の整理・フィールド調査などを実施し、その成果をレポート・ポスターにまとめました。

学びから得たこと・身につけたこと

個人のゼミ活動を通じて、生成AIの教育現場への応用可能性について深く理解することができました。特に、教育において技術の進化が教育現場にどのように貢献できるかを実感しました。

また、教員の負担軽減や教育の質向上に向けた具体的な活用法を考察することで、教育現場の課題解決に向けた視点を養うことができました。さらに、ICT技術の活用による教育格差の是正にも関心を持つようになりました。

増原州真

ゼミ活動で、私はキャリア教育に興味を持ち、この1年間「中学校におけるキャリア教育」についての研究しました。キャリア教育の仕組みや取り組みについて論文や書籍を活用し、研究を進めることができました。

今後は、キャリア教育で行われている「キャリア・パスポート」の活用に絞り、キャリア・パスポートの利用の仕方から今後どのような課題があるのかについて研究していきます。

松本 蘭

北近畿における医療福祉サービスを持続可能とするためにはいかなる資源が必要か

教員名 星 雅丈



学修のねらい

2024年度の当ゼミは英語論文の抄読会から始めました。8名の学生が個々に興味のある領域の英語論文を選びレジュメ作成・発表することにより、論文の知見をゼミ内で共有します。今夏には、昨年度来の研究テーマ「北近畿における地域医療連携推進法人構想に資する医療介護施設の現状分析と医療福祉専門職人員の全数調査」をポスターにまとめ、第50回日本診療情報管理学会学術大会の学生セッションで発表しました。当ゼミでは例年11月に沖縄研修を実施しており、名桜大学との研究交流会は2018年度から7回を数えます。今回は当ゼミ生と名桜大学生による混合5グループで、診療情報管理士資格の分野別模擬試験を作成するワークを行いました。グループ全員で教科書を読み込み、話し合いつつ慣れない問題作成に挑みました。他学との接点が少ない本学の学生にとって、同じ目標を持つ学生との真剣な議論は新鮮な経験をもたらしたことでしょう。

学びから得たこと・身につけたこと

私は福岡で開催された診療情報管理学会への参加が印象に残っています。この学会は病院にお勤めの方々と私たちのような学生が入り混じった形で研究発表が行われていました。同じようなテーマでも、社会人発表と学生発表での視点の違いが面白く、多くの視点から物事を見る大切さを学びました。また、学生発表では他の学校がどのような学習を行っているのか、病院との連携はあるのかなどを知ることができる良い機会となりました。

学生 A (学生氏名非公開)

私は沖縄研修と学会での発表が印象深いです。沖縄研修では他大学で同じ目標を持つ学生と交流でき、これまでの学びを確認することもできました。学会発表は大変緊張しましたが、質問に落ち着いて答えられた点で自信を深めました。また他大学の災害支援に関する研究から、私たちの目標とする府県を超えた医療・介護資源の連携協働体制「北近畿メディカルネットワーク」は、災害時支援にも可能性が開かれていると感じました。

学生B（学生氏名非公開）

卒業研究Ⅰ・Ⅱ テーマ一覧

ゼミ担当教員	卒業研究テーマ	学生氏名
大 谷 杏	ペット避難の有用性について ーペット避難に関する意識と現状の観点からー	岩 切 麻 裕
	地域社会におけるスポーツの可能性	匿名 希 望
	UJターン行動と地域愛着の関係性について	匿名 希 望
	社会的役割と地域住民のニーズを満たす公共図書館像	匿名 希 望
	地方の水族館が地域にもたらす効果についての研究	田 中 亜 美
岡 本 悦 司	地方財政状況調査DWH 公立病院の経営実態	淡島美千花
	日本におけるアジア3か国との貿易のDWH作成	扇 田 柚 佳
	消防白書 救急車業務の実態と分析	服 部 純 平
	患者調査総患者数推計のデータウェアハウス化 ー継続的な受療行為と傷病評価の分析ー	古 牧 拓 己
	電子処方箋対応医療機関・薬局数からみる医療DXの現状について	前 嶋 亮 汰
加 藤 好 雄	クラウドシフト・DX化に伴う国内ERP市場の変革期における競争優位性 ーワンストップソリューションによるオービック社の競争優位源泉の分析ー	匿名 希 望
	戸建住宅メーカーの急成長に見る不動産業界の経営戦略 ーオープンハウスの狭小地特化モデルを例としてー	匿名 希 望
	半導体市場における垂直統合型と水平分業型の競争戦略 ーテキサスインスツルメンツの成功に見る市場特性の活用ー	渡 邊 梨 生
亀 井 省 吾	CSVと従業員の幸福度の相互作用 ーマネジメント層を対象としたインタビューを通じてー	宇 苗 隼
	モチベーションに関わる内発的動機と自己理解の関係性について ー福知山公立大学生の企業選択を通じてー	鍋 島 圭 輔
	利己的行動と利他的行動の交互現出によるキャリアインパクトについての研究 ー時間的変遷を通じて見た利他と利己のキャリア形成への影響ー	平 田 翔 大
	ポストコロナにおける美容意識の再評価 ー大学生の化粧に対する認識の変化を通してー	福 井 鈴 菜
	漫画が促す自己変容 ー学生の漫画に対する価値観を通じてー	本 馬 惇 平
川 島 典 子	福知山における持続的な学生団体活動と地域との関係性 ー福知山公立大生による学生団体を通してー	矢 野 秀 真
	特別支援教育とインクルーシブ教育～豊中市の事例を通して～	磯 崎 新 太
	児童虐待の原因と地方自治体の対策に関する一考察 ー元児童相談所所長へのヒアリング調査を通してー	打 出 康 希
	健康寿命延伸に関する考察 ー大分県から学ぶ健康寿命延伸の取り組みー	尾 立 匡 陽
	日本の非行少年の現状 ～地域のつながりと少年犯罪の割合の関係に着目して～	近 藤 航 世
倉 田 良 樹	メディアにおける手話の認知拡大とその効果 ーNHK放送資料と映画・小説作品を通してー	仁 木 杏
	スポーツを活用したまちづくりについての研究 ～NPO法人出雲スポーツ振興21の事例を通して～	穂 積 愛 成
	児童虐待防止につながる子育て支援 ー社会福祉法人みねやま福祉会の事例からー	松 本 麗 海
	自動販売機とコンビニエンスストアにおける 清涼飲料水のカニバリゼーションの研究 チャンネルのカニバリゼーションについて	匿名 希 望
	アニメツーリズムによる地域振興の可能性とその条件	匿名 希 望
小 山 元 孝	選択的夫婦別氏制度を導入しない合理性はあるのか	吉 田 琉 生
	経営戦略による地場産業の発展 ～今治タオルの復活を事例に～	外 岡 悦 史
	介護人材不足の課題解決に向けた訪問介護事業のこれから ～訪問介護サービス提供者の視点から～	匿名 希 望
	地域防災力向上のための学生消防団員増加策について ー福知山市を対象としてー	大石田将貴
	サードプレイスとして機能する場とその特性について ー京都府宮津市を中心としてー	羽 刈 陽 香
佐 藤 充	兵庫県養父市内における「道の駅」の特徴を生かした地域振興策について	小野山那魅
	今後の総合的な学習の時間における地域学習の在り方について ～宇治学・丹後学を事例に～	矢 口 唯 人
	近畿北部における「自家用有償旅客運送」の動向と今後の方向性について	山 田 晴 己
	京都府亀岡市におけるコンテンツツーリズムを援用した「明智光秀」を活用するシティプロモーションについて	和 田 創 太
	条件不利地域におけるドローンを活用した医薬品配送の現状と課題	五十嵐麻衣
佐 藤 恵	地域住民の観光者受け入れと観光地域づくりへの関与 ー京丹後市夕日ヶ浦を事例にー	清 吉 琉 加
	鉱山跡地の観光開発プロセスの事例比較分析 ー常磐炭鉱と夕張炭鉱に着目してー	匿名 希 望
	地域コンテンツを利用したふるさと納税返礼品の現状と課題	匿名 希 望
	京都府京丹後市の産業観光 ー伝統工芸品「丹後ちりめん」の活用ー	水 口 陽
	日本における分散型ホテルの実態と商店街ホテルの取り組み ーSEKAI HOTEL布施の事例を通してー	匿名 希 望
渋 谷 節 子	SNS依存と承認欲求に関する研究	佐藤葉瑠香
澁 谷 節 子	地域活性化におけるカフェ（喫茶店）の役割と可能性について ー京都府福知山市と新潟県佐渡市のカフェの調査を通してー	菊池保乃加
	地域において祭礼行事を行う意義 ー福知山市夜久野町「額田のダシ行事」を中心にー	成田安津美
	Japlishの使用と日本の英語教育に関する考察 ～多言語国家シンガポールの英語教育を参考に～	棕 平 玲 香
	日本のマンガの文化的特色 ～バンド・デシネと比較して～	匿名 希 望
	日本人の価値観と宗教の関係性についての一考察	和 田 佳 大
星 雅 丈	日本の弓道文化を世界へ ～日本製弓具の輸出入規制と品目分類について～	松 林 亜 優

ゼミ担当教員	卒業研究テーマ	学生氏名
鄭 年 皓	異文化コミュニケーションギャップの問題と解決策	北 沢 駿 斗
	少額投資が与える金融市場への影響	神 成 沙 羅
	日本のインターンシップにおけるその目的と運用に関する考察	佐々木大志
	コンテンツとメディアの関係に着目したコンテンツIPビジネスの研究	羽 尻 一 稀
	VTuberビジネスにおける動画編集のAI化	三島慶次郎
杉 岡 秀 紀	携帯電話キャリアにおける価格戦略	匿名 希 望
	綾部市における移住・定住支援策についての一考察 ー情報発信の重要性に注目してー	岡 田 唯 花
	高校生を対象としたサードプレイスのあり方 ー京都府京丹後市のrootsを事例としてー	小 谷 優 衣
	若者に開かれた公民館のあり方についての一考察 ー福知山市を事例としてー	田 中 黄 象
	「総合的な学習の時間」とキャリア探索の関連性についての研究	富 江 美 有
谷 口 知 弘	持続可能な地域公共交通のあり方についての研究 ー福井市の乗合バス事業を事例にー	中 村 心
	高齢ドライバー問題と公共ライドシェアについての研究 ー京丹後市を事例にー	平 原 将 貴
	アフターコロナにおける「新しい関係人口」の創出についての一考察 ー長崎県内の動物園を比較してー	神 近 仁
	高大・産学連携による、若者を対象とする日本酒文化の浸透への取り組み「若者酒づくりプロジェクト」若者の日本酒に対する苦手意識の払拭と飲酒機会の創出	植 松 思 絵
	高大・産学連携による、若者を対象とする日本酒文化の浸透への取り組み「若者酒づくりプロジェクト」～日本酒のコンテストから考えるプロモーション手法～	岸 田 光 生
張 明 軍	高大・産学連携による、若者を対象とする日本酒文化の浸透への取り組み「若者酒づくりプロジェクト」～若者へ向けた日本酒の販売方法～	佐 藤 大 斗
	域学連携ワークショップによる大学生の地域愛着の醸成 ー縁結び、福めぐるプロジェクトの実践を通してー	匿名 希 望
	高大・産学連携による、若者を対象とする日本酒文化の浸透への取り組み「若者酒づくりプロジェクト」ー本プロジェクトをきっかけとした、販売形態が及ぼす消費者への経験価値ー	平 川 静 恭
	域学連携ワークショップ「縁結び、福めぐるプロジェクト」による大学生の地域愛着の醸成 ー地域住民と大学生の関係性の深化がもたらす地域への愛着心についてー	松 尾 健 伸
	域学連携ワークショップ「縁結び、福めぐるプロジェクト」による大学生の地域愛着の醸成 ーアルバイトにおける地域住民との交流による大学生活への影響ー	渡 辺 葵
中 尾 誠 二	域学連携ワークショップ「縁結び、福めぐるプロジェクト」による大学生の地域愛着の醸成 ー地域住民との交流による関係人口意識の拡大ー	福 永 知 捺
	農産加工品のウェブマーケティングの実態 ～WEB解析ツールを用いたECサイトの利用者分析を通じて～	栗 田 剛 佑
	ライフスタイル移住者の地域交流と地域貢献意識の関係性 ー京都府綾部市の事業者に着目してー	須 田 遼 雅
	訪日客観光案内サービスの向上意欲に及ぼす要因 ー観光ボランティアガイドの異文化理解力に着目してー	匿名 希 望
	テキストマイニングを活用した山陰海岸ジオパークに関する文献の特徴分析	沼 田 智 貴
福 畠 真 治	ヘルスツーリズムに携わる従業員の職務満足度からみる訪日客受け入れ意識	匿名 希 望
	ゴミの分別の厳しさが住民に与える影響	湯 浅 優 貴
	地方におけるウォータースポーツツーリズム推進と水難事故防止策の考察 ー沖縄県・京都府・兵庫県の事例を中心にー	新 垣 大 翔
	地域資源を活用した地域教育の可能性 ー北海道むかわ町、京都府福知山市、和歌山県みなべ町を例にー	北 田 真 穂
	現代人の婚活力低下に関する考察 ー地域社会の存続を目指してー	富松はる恵
星 雅 丈	大都市圏出身の若者と地方社会の関係性創出に関する研究 ー北海道むかわ町、滋賀県長浜市を例にー	中 村 友 彌
	大地に根差して生きる人々の魅力に関する考察 ー北海道遠軽町・山口県山口市・滋賀県長浜市を例にー	新 名 芙 袈
	自治体職員における副業の可能性と地域に合わせた推進の重要性 ー京都府3市・和歌山県すさみ町の事例を中心にー	平 井 未 憂
	音楽を通じた交流促進と地域社会の活性化に関する研究 ー先行事例と学生団体の実証実験を通してー	吉 見 光 洋
	空き家政策の多様化と"地域資源活用型"アプローチの可能性 ーふるさと納税を活用した地域活性化について考察ー	杉 原 篤
富 山 航 太	高校普通科に属する生徒におけるソーシャルスキルトレーニングの有用性の検討	野田恵里花
	通信制高校における自学自習を前提とした制度と、実際の教育現場における 生徒指導の実態との乖離	匿名 希 望
	全剣連の剣道指導の手引きにおける実践指導法の改善	廣山 航太
	医療MaaS（Mobility as a Service）の可能性を探る ー医療資源の存続が困難な地域における生活を守るためにー	匿名 希 望
	「子を授けられない人」が子を持つために選択できる方法は？ ー養子縁組、代理懐胎などの選択の研究ー	匿名 希 望
宮 崎 崇 一	富山県において救急医療電話相談（＃7119）は機能するのか ー救急搬送など救急医療機関のDPCデータ等に基づく現状分析からー	匿名 希 望
	紹介状なし初診選定療養費が地域医療支援病院に及ぼしたインパクト ～患者の受診動向の変化から探る～	匿名 希 望
	京都府における医療資源の南北問題は解決可能か ー隣接県(兵庫県)との地域医療連携の現状分析からー	匿名 希 望
	山陰地域における地域医療の研究 ー島根県と鳥取県における地域医療体制に差はあるのかー	匿名 希 望
	宮崎県における二次医療圏再編の研究 ー医療資源偏在の解消をめざしてー	匿名 希 望
高 橋 大 志	茨城県における医師偏在研究 ー医師集中地域と過疎地域の分析ー	匿名 希 望
	宇和島医療圏における病院機能再編が住民に与える影響の研究	匿名 希 望
	滋賀県湖北医療圏における公的医療機関の再編は何をもたらすか？ ー診療科再編・経営統合のシミュレーションに基づく検討ー	匿名 希 望
	コロナ禍前後公立病院の経営状況はどのように変化したか ー大阪府下の公立病院（2018～2023）の収支報告に基づく研究ー	匿名 希 望
	高齢の妊娠希望者が安全に出産するには何が必要か？ ー日本における不妊治療・高齢出産の現状分析からー	匿名 希 望

地域キャリア実習

プログラムについて

本学では、大学での学びと社会での経験を結び付け、学生の学びの深化や学習意欲の喚起、自己の職業適性や将来設計について考える機会を学生に提供することを目的に、教育課程に「地域キャリア実習」というプログラムを位置づけております。この「地域キャリア実習」では、広く一般に募集を行っている大企業等のインターンシップだけでなく、北近畿を中心とした地域の事業所にて就業体験ができる機会を設定し、学生からは普段目につきにくい企業の情報に触れる機会を設け、将来設計について考えるための多種多様な材料を提供したいという意図も含まれています。

実習までのスケジュール

4月～5月	協力企業への呼び掛け
6月	実習希望学生の募集及び選抜
7月上旬	学生の実習先決定、事前研修
7月中～下旬	実習先事前訪問（打ち合わせ）
8月～9月頃	実習（8月中旬～9月末頃で5日間～10日間） ※企業によっては10月に実施も有
9月～10月頃	報告書の作成
12月	学内報告会の実施



福知山市役所

はじめに

本稿では、福知山市にて行われた実習について、その内容と、そこで得た学びについて報告します。福知山市役所を実習先を選んだ理由は3つあります。

1つ目は地域社会への貢献です。福知山市は住民の温かさ、住みやすさ、豊富な観光資源が魅力のまちです。これらの魅力を発信する取り組みに参加することで、地域社会に貢献できると感じました。大学生活と実習を通じてスキルを身につけ、実践的な解決策を提案・実行することで、地域社会の発展に寄与できると考えました。

2つ目は広報活動の経験です。福知山市で生活している中で、福知山市役所は広報活動に力を入れていると感じました。私はまち

づくりにおいて広報が極めて重要だと感じ、秘書広報課の活動に興味があり、この分野での実務経験を積むことが将来のキャリアに大いに役立つと考えました。実習を通じて実践的な経験を得ることで、広報活動のノウハウを学べると考えたからです。

3つ目は、市民との関わり方の学習です。福知山市役所の実習を通じて、福知山市民との関わり方を学ぶことができます。業務を見学し、市民との接し方やコミュニケーションスキルを学ぶ機会を得ることで、将来のキャリア目標達成に向けて非常に重要なスキルを身につけられると考えたからです。

なお、福知山市役所の企業概要については以下の通りです。

実習先概要

<企業名> 福知山市役所
<所在地> 京都府福知山市字内記13番地の1
<主要な事業内容>
市政運営・窓口業務・広報活動など

実習の概要

実習は、8月19日から23日の計5日間の日程で実施されました。各日における実習の内容は主に以下の通りです。

- 【1日目】オリエンテーション、ガイダンス、先輩職員の方と懇談会
- 【2日目】職員インタビュー、職員インタビューの記事作成、先輩職員からのメッセージ
- 【3日目】秘書広報課 アンケートのフォーム作成、プレリリースの記事作成
- 【4日目】政策形成ワーク
- 【5日目】インターンシップ体験内容共有、自己分析ワーク

実習を終えての学び

私が福知山市役所の実習で印象に残っていることは3つあります。

1つ目に挙げるのは、秘書広報課で業務を体験している際、職場の職員全員がそれぞれ異なる業務をこなしているにも関わらず、互いに質問し合い、アドバイスを交わすなど、活発なコミュニケーションが行われていたことです。

2つ目に挙げるのは、政策形成ワークで、初めて「ペルソナ」という概念を学び、チームでそのペルソナを考える体験をしたことです。市役所では市民全体に向けた政策を考えるというイメージを私は持っていましたが、個々の市民を深く掘り下げてペルソナを設定し、それに基づいて業務が行われているという点が非常に印象的でした。

3つ目に挙げるのは、私は、市役所に堅いイメージを抱いていましたが、実際に福知山市役所での実習を通じて、職場や職員の

方々の明るく親切な対応に触れ、予想していたイメージとは異なる部分を多く感じ印象に残りました。

最後に、これまで自分が働いている姿を具体的にイメージすることはできませんでしたが、今回の実習全体を通じて、その姿がはっきりと想像できるようになりました。それは、実際に市役所でのような業務が行われているのを知ることができたことに加え、堅いイメージを持っていた市役所が、コミュニケーションが活発で、明るい職員が多いということを実感できたからです。

また、私たち学生にとって実習の5日間がより充実したものとなるように、福知山市役所の職員課の皆様が計画を立ててくださり、私たち学生に関わってくださった職員の方々もより良い経験を提供しようと接してくださったおかげで、貴重な経験をさせていただくことができました。



■はじめに

本稿では、一般社団法人 KOKIN で行われた実習について、その内容とそこで得た学びについて報告します。一般社団法人 KOKIN を実習先を選んだのは、旅行・観光業界に興味があり、そのなかでまちづくりにおける企画をしてみたいと考えたからです。地域の課

■実習先概要

<企業名> 一般社団法人 KOKIN
<所在地> 京都府舞鶴市南田辺 126-5
<主要な事業内容>
旅館業・飲食業・サービス業

■実習の概要

実習は、9月9日から 9月13日の計5日間の日程で実施されました。各日における実習内容は主に以下の通りです。

- 【1日目】自己紹介、宰嘉庵の見学、福知山市地域おこし隊とのオンラインミーティング、舞鶴市に活かせるアイデアをインプット・アウトプット
- 【2日目】西舞鶴駅周辺と赤れんがの案内、企業×学生のイベントに向けてオンラインミーティング、KATALab.の運営
- 【3日目】SEW STAYと福井センイ工場の見学、市役所の方から舞鶴市の説明、吉原入江の見学、KATALab.の運営
- 【4日目】舞鶴市に活かせるアイデアをインプット・アウトプット、舞鶴同期会、KATALab.の運営
- 【5日目】team.m とのオンラインミーティング、最終発表、KATALab.の運営

■実習を終えての学び

今回のインターンを通して、様々な経験をさせてもらったなかで、印象に残ったことは「舞鶴市に対する思い」です。その思いを実感させてもらった要因が3つあります。

1つ目は、宰嘉庵、SEW STAYの見学です。それぞれの宿泊施設には舞鶴市ならではのコンセプトやストーリー性があることを知り、創設者の舞鶴市に対する思いを感じました。また、宿泊施設に泊まるだけで終わるのではなく、宿泊施設周辺の舞鶴市を知ってほしいという思いから「2泊3日のプラン」を立てていました。そこから、宿泊施設創設の舞鶴市の魅力を知ってほしいという思いが伝わってきました。

2つ目は、舞鶴同期会の参加です。舞鶴同期会とは一般社団法人 KOKIN 原田翔太様が主催している企画であり、舞鶴市の企業の若手社員が集まり、1年を通して活動を行います。この企画に参加するなかで、異なる企業の若手社員が交流する機会が少ないなか、つながれる場を作ることの大切さを感じました。こういった企画によって、若者が都市部に流出する人口が多い現状、若者が舞鶴市で働き続けたいと思うきっかけになるのではないのかと考えます。また、原田様が「活動が終わったとしても参加者同士が関係を続けていってほしい。」とおっしゃっているのを聞き、原田様の舞鶴市の若者に

題を把握し、地域の特徴や住民のニーズを捉えた上で、地域の発展と住民の満足度を向上できる企画を実現したい。そして、まちづくりにおける企画を通して、課題解決能力を高めたいと考えます。

対する思いを知ることができました。

3つ目は、KATALab.の運営です。KATALab.とは誰もが入れるコミュニティスペースであり、2日から5日の間運営させてもらいました。舞鶴市の高校性が多く訪れており、異なる高校生同士であってもみんなが楽しそうに会話をしていました。KATALab.は、多様な人々が交流できる場となり、地域のつながりを深めるのではないかと感じました。2日目には、京都市に進学した大学生が来ており、卒業した高校生が戻ってこられる居場所になることも感じました。運営するなかで、KATALab.のテーマである「いつか舞鶴に帰ってきたい。そんな若者を増やしたい。」という思いを実感することができました。

このように、何か活動を行う際に思いを込めて向き合った活動は、そのものをよりよい形にすることができることを学びました。最終発表では、「舞鶴市で自分ができること」を企画するなかで、インターンで得た舞鶴市に対する思いを込めて発表に挑むことができました。そして、企画職の仕事に携わりたいという思いがより強くなりました。今後も、今回のインターンシップを通して、得た経験や学びを生かしていきたいです。



■はじめに

本稿では、株式会社石坪にて行った実習内容と、そこで得た学びについて報告します。今回、実習先として株式会社石坪を選択した理由は、昨年亡くなった祖母が、闘病生活中に介護や福祉用具が必要となり、福祉用具などをレンタルしていたことから、そういった企業の支援方法や業務内容について知りたいと思ったからです。ま

■実習先概要

<所在地> 京都府福知山市篠尾新町2丁目88番地
<主要な事業内容>
福祉用具の貸出・設置・修理、病院への卸売り、補聴器相談など

■実習の概要

実習は、8月26日、9月3日、9月4日の計3日間の日程で実施されました。各日における実習の内容は主に以下の通りです。

- 【1日目】メディカルグループ同行。福知山市内の開業医や施設をまわり、商品の配達や受注。
- 【2日目】ヘルスケアグループ同行。お客様のお宅へ訪問し福祉器具の貸出または回収、福祉器具のお試し。
- 【3日目】直販グループ同行。本社1階の店舗スタッフ体験、補聴器相談やクリーニング、品出し。

■実習を終えての学び

今回、株式会社石坪にて3日間のインターンシップを受け入れていただき、メディカル業務、ヘルスケア業務、店舗業務と3日間とも全く異なる業務内容を体験することができました。

1日目のメディカル業務では、福知山公立大出身の先輩に付かせていただき、納品に必要な品物を物流センターで車に乗せ写真左、開業医や介護施設などをまわりました。

1日目の実習では、取引先との関係構築、事務の方や同グループ社員との連携、そしてスケジュール管理が大切だと学びました。取引先へ行った際に、同行させていただいた社員の方と取引先の看護師の方が気軽に話されている姿を見て、ただ商品の受注納品をするだけでなく、こういった関係構築が今後の営業にもつながる必要要素だと感じました。また、曜日によっては兵庫県も担当しているためそちらへ行くそうで、急を要する納品や相談は他の社員と連携を取るなど調整が必要なため、予定の管理は難しそうだと感じました。

2日目のヘルスケア業務では、同じく必要な福祉用具を物流センターで車に乗せ、レンタル予定のお宅への訪問、不要になった福祉器具の回収、どのようなタイプの車いすがよいか体験相談など、1日

た、医療福祉の面からの地域連携であるとか地域との関わりについて、具体的に想像できていなかったため、地域との関わり方についても勉強したいと思ったからです。

なお、株式会社石坪 の企業概要については 以下の通りです。

同行させていただきました。2日目で最も印象に残っているのは、社員さんとの会話です。やりがいやを尋ねた際に、福祉用具は自分でできる事を増やすための支えになる物であるため、生活しやすくなったとかできるようになったという意見や顔を見て嬉しくはなるが、最終的に状態は悪化する一方なので、仲良くなる分亡くなられたときに辛く感じると話されました。

3日目の店舗では、ちょうど補聴器の無料クリーニング実施期間であったため、補聴器のお客様が多く来店されました。専門的な技術が必要になるためできる事は少なかったが、補聴器の仕組みや種類、音の調整方法、また人口内耳について詳しく説明していただきました。実習を通して、3日間とも業務内容は異なっていましたが、地域の方々と深く関わり、親身に相談を受けるという点は共通していたと感じました。特に、この分野においては、病気や体に関するデリケートな話題の相談が主となるため、深く信頼関係を構築することで、利用者がどんなことでも相談しやすい環境づくりができ、それは安心した生活に繋がると学ぶことができました。



診療情報管理士とは

病院で日々発生する患者さんの診療に関わる重要な**情報の番人**であり、医師や看護師が作成した診療記録をチェックする**お目付け役**であり、病院に蓄積する情報を分析し、診療や病院経営に必要な知見を提供する院内の**コンサルタント**です。

● 実習病院を決める ●

実習でお世話になる病院は、以下の流れで決まります。

- ① 実習を受けたい病院の候補を探す。

(学生) ※3年次3～4月
- ② 病院に依頼状(予告)を送付する。

(大学) ※3年次4～5月
- ③ 病院に連絡を入れ、実習の受け入れを依頼する。

(学生) ※3年次4～5月
- ④ 実習病院が決まる。

※3年次6～7月

☐ 依頼状、協定書 ☐ 自己紹介書の送付・持参
- ⑤ 実習病院の事前調査・研究を行う。

(学生) ※3年次6～7月
- ⑥ 実習病院に事前挨拶に行く。

(学生・大学) ※3年次8～9月

病院さんにも様々なご都合があり、ご希望が必ず叶うとは限りません。その場合は、先生と相談しつつ実習病院を再検討することになります。

実習病院を行う理由①

診療情報管理士認定試験の受験資格を取得するには・・・
3年次前期までに、以下の全科目の単位を修得し、さらに、**病院実習**に赴く必要があります。

<1年次>

- ・解剖生理学

・医学英語

・医療概論
- ・感染症・呼吸器学

・血液内分泌・腫瘍学

<2年次>

- ・精神神経・循環器学

・消化器・泌尿生殖器学

・医療管理論Ⅰ

・医療情報学

・診療情報管理論
- ・周産期・先天異常学

・皮膚筋骨格・中毒学

・医療管理論Ⅱ

・医療統計学

・診療情報分類法総論

<3年次>

- ・医療管理論Ⅲ

・診療情報分類法演習

・病院実習

実習病院を行う理由②

病院実習は、認定試験の受験資格を取得するためだけに行うものではありません。

普段、絶対に入ることのできない病院事務職や診療情報管理士さんが働く空間にお邪魔して、普段の業務の流れ、他職種とのかかわり、会議の様子などを見ることができます。病院によっては、情報の入力やデータの分析などを経験できます。

それまで机上で学んだことが医療現場でどのように活きるかの**実感**が伴うことにより、勉強や就職活動に向けてモチベーションを高めるよいきっかけになります。

学生は何を感じたか

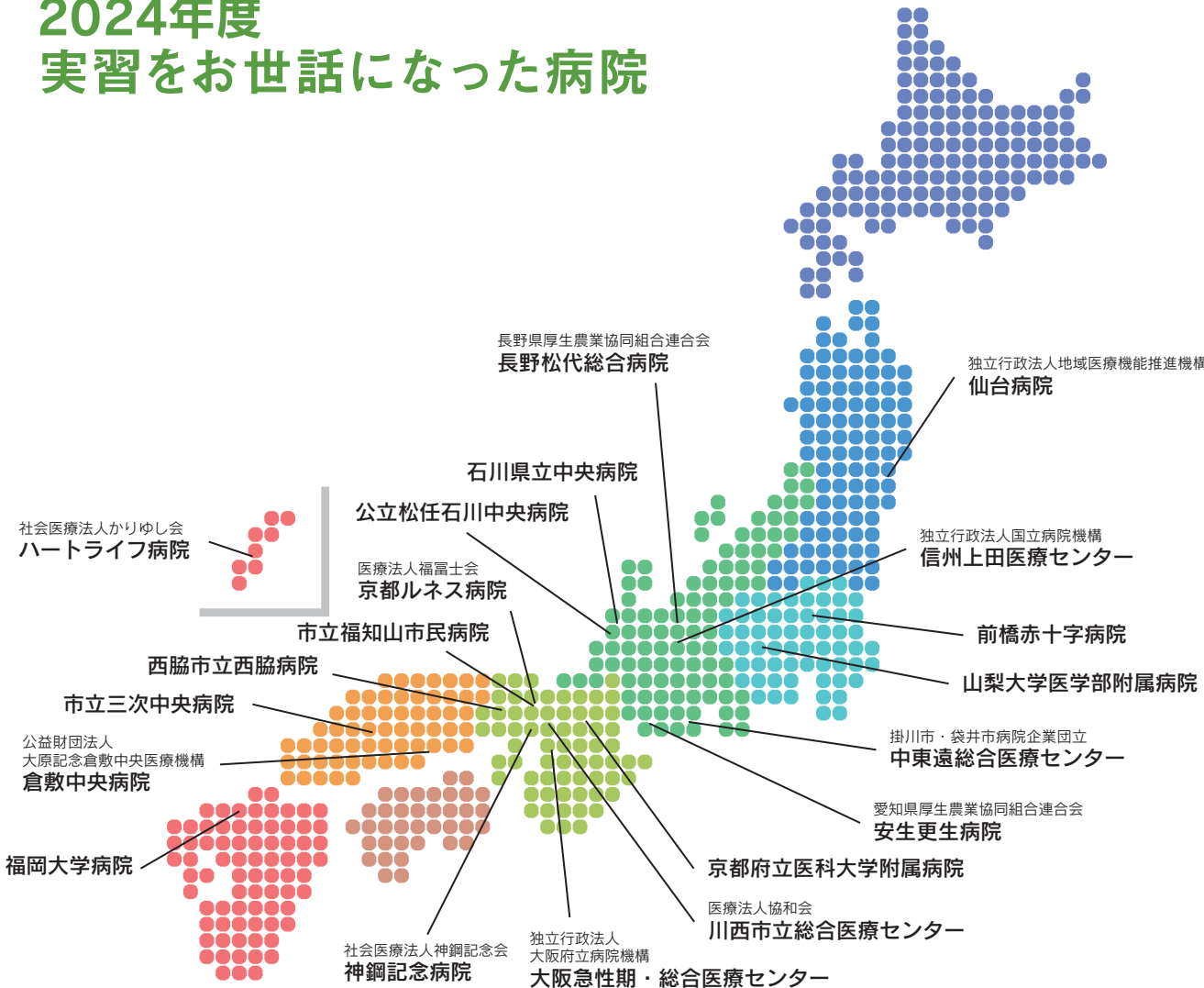
- 本当に分らないことだらけですが、勇気をもって質問しましょう。はじめは怖いと思いますが、実習先の方もこちらが「学生」であるとわかってくださっているので大丈夫です。
- 患者さんの体調や聞こえ、望んでいることを察して行動することが必要であると感じました。接客のアルバイト経験が生きる場面だと思います。
- 実習中に教わったことは、記憶とメモと日誌にしか残りません。実習は思っているよりハードですので、何をどこに書くなどメモの取り方を決めておくといいです。
- 診療情報管理士や医事課の業務は、受付やクラークの業務と比べて自分のペースで落ち着いて取り組めるという印象を受けました。
- 長いようで早いをできるだけ多く学んでいただければ、大変よい経験につながると思います。

学生は何を学んだか

- 同じ質の医療を 24 時間 365 日提供するために、安定した経営基盤を維持する必要があり、そのためには遅滞なく正確に情報を記録し、病院全体で共有する必要があることを学びました。
- 与えられた課題や業務をこなすだけでなく、その課題や業務がどのような目的でどのように役立つのかを考えることで、要点や注意点がわかり、業務の取り組み方や課題の考察も変わることを経験できました。
- 自分の中にある「当たり前」を押しつけず、分かりやすく伝える工夫が必要であることを学びました。
- 総合職(マネジメント職)として配属された場合は、多種多様な、診療情報管理士とは全く関係のない仕事もすることがあることを知りました。

(学生の病院実習報告より)

2024年度 実習をお世話になった病院





公立大学法人

福知山公立大学

The University of Fukuchiyama

地域経営学部 地域経営学科／医療福祉経営学科
情報学部 情報学科

〒620-0886 京都府福知山市字堀 3370
TEL.0773-24-7100 FAX.0773-24-7170
<https://www.fukuchiyama.ac.jp>

